樹葉針



第七號

東京商科大學一橋山岳部

自他共に許す

片桐のテントとリュックサック



更に一層の努力と研究とを以て皆様の御期待に副ひたいと願つて居ります。何卒御用命下さいませ

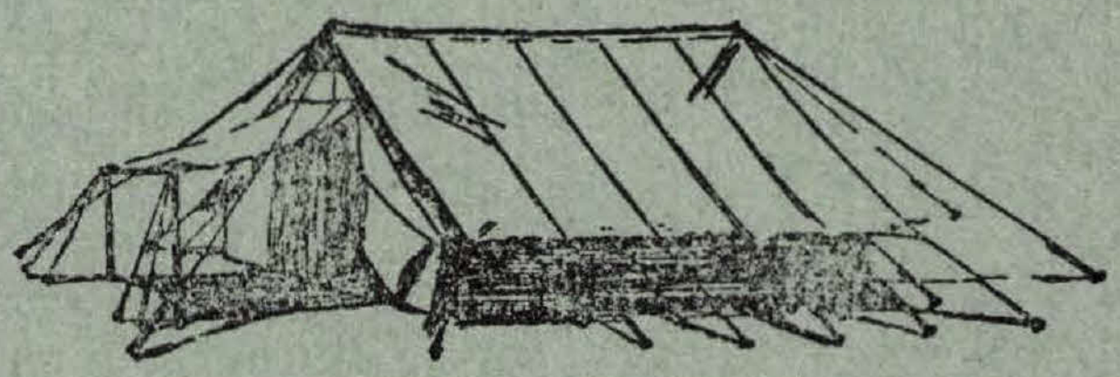
営業品目

テント、リュックサック、スリーピングバッグ、スキー帽、アザラシ皮、ノールウエーバンド、アイゼンケース、ピッケル等

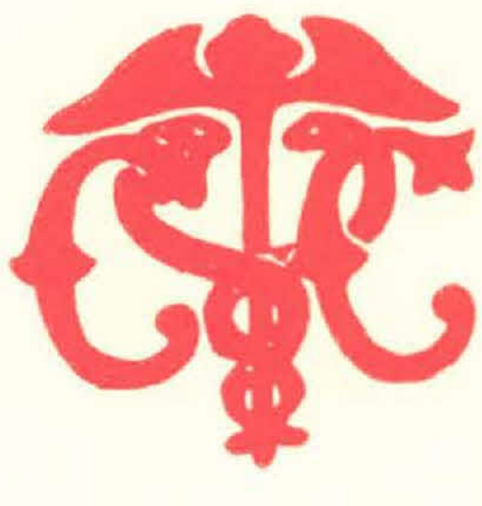
東京市神田區神保町三ノ三（神保町ビル）

片桐商店

電話九段(33)二五五六番



樹葉針



第七號

1932——1934

針葉樹第七號目次

紀文

VAL FEX……三

磯野計藏……三

記錄

北海道……八

上越國境●日光方面……一二

上信國境方面……一一〇

東京附近及富士山方面……一一三

秩父方面……三一

八ヶ岳方面……三三

妙高山。火打山方面……三八　磯野計藏……口繪
北アルプス……四〇　磯野計藏……口繪
南アルプス……五九　磯野計藏……口繪
中央アルプス……六九　磯野計藏……口繪
スキー合宿……六九　堀岡清……對四〇
山部小舍……七三
報……八七
寫眞
Piz Tremoggia より Monte della Disgrazia
Crasta に於ける Christian Klucker の墓
Val Fex の Christian Klucker の家
Piz Tremoggia の Gendarme

前穂北尾根岳……堀岡清…對四〇
常念南望……小谷部全助…對五九
間ノ岳より地圖……磯野計藏……五
ENGADINE略圖……



Piz Tr.moggia より Monte deI a D:sgrazia

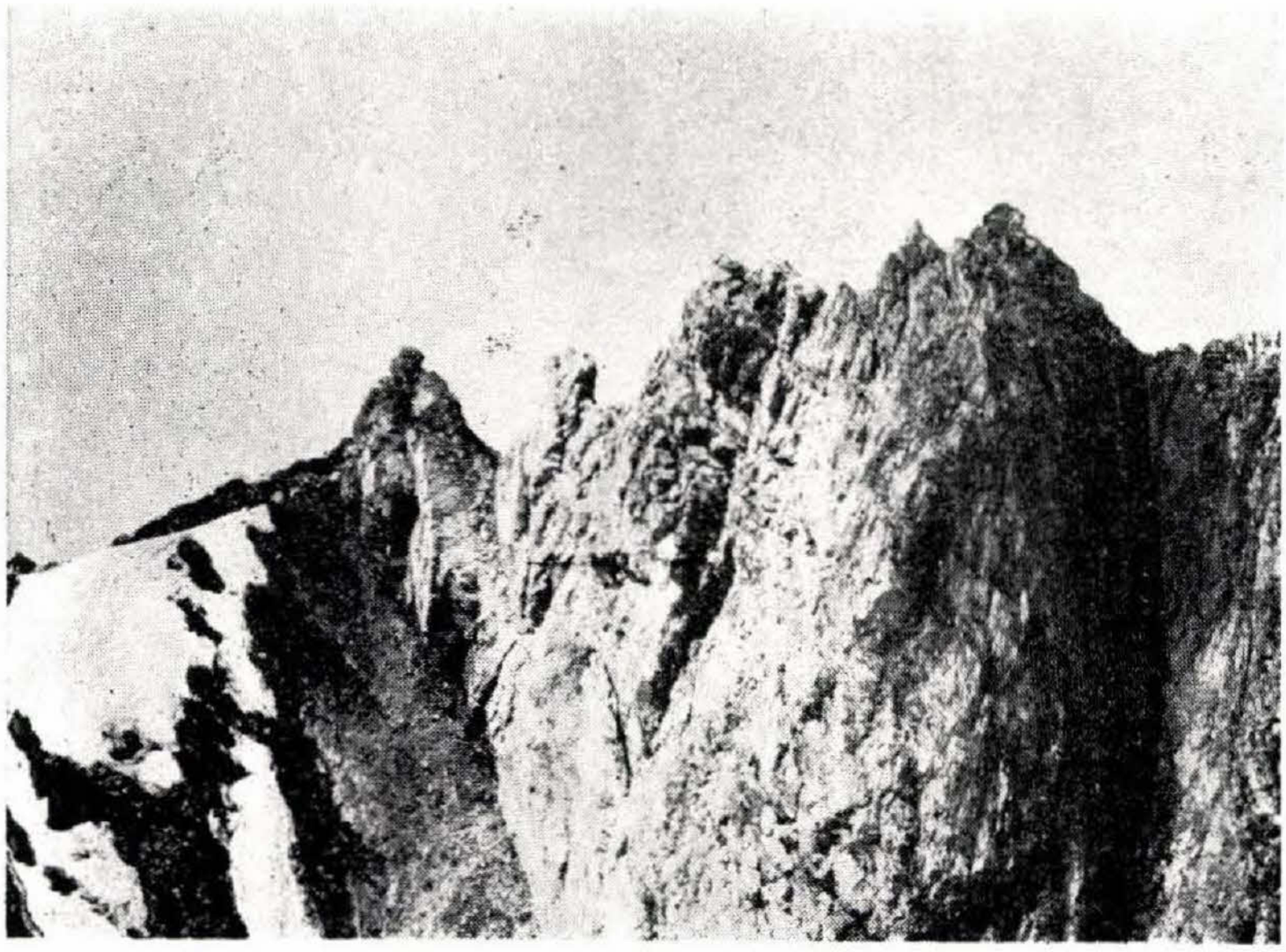
磯 野 計 藏



Crasta に於ける Christian Klucker の墓

磯　野　計　藏





(上)　Val Fex のChristian Klucker の家

(下)　Piz Tremoggia の Gendarme

磯野計藏

紀文



SILVAL FEX

磯野計藏

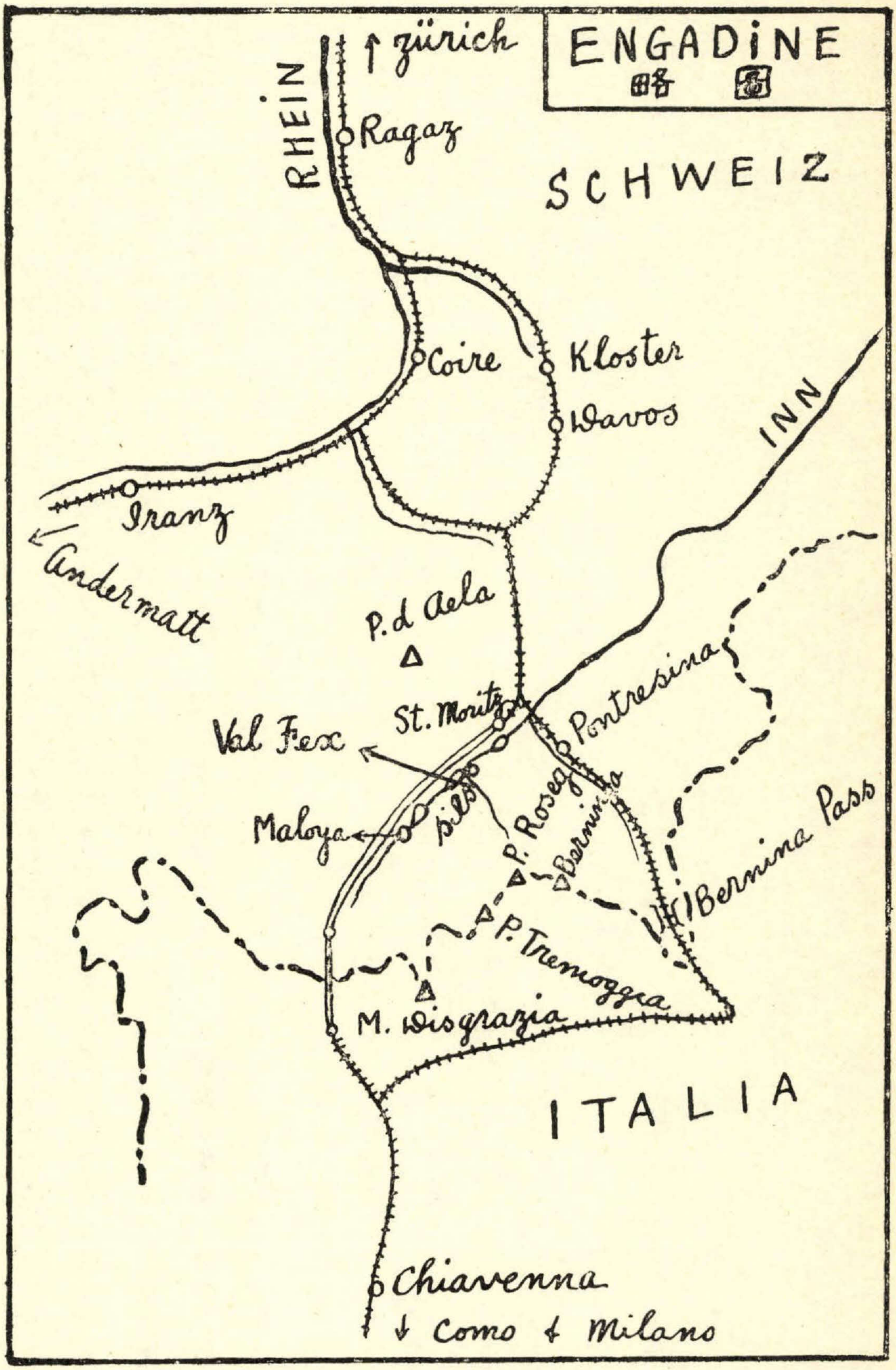
クリスチヤン・クルツカーの自叙傳を讀まれた方には親しい名前であらうが、二人で入つて行つたのは、一九三三年の八月も末頃であつた。グリンデルワールドから、ブリーグへ出、セガンチイニ・グリンデルマツトからイランツ、そしてポントレシイナ、さらにサアへと來たつた。ムゼウムを見て、それからポン・モリツツ・ムゼウムを見て、それからポシユト・アウト（Post Auto）でデインもシルヴアプラナ（Silvaplana）から上はサン・モリツツのスワンキーネスもなく、Silser-see と Silvaplaner-see のちよつと河口湖を思はせる

明るい湖水をだいて、その名も氣持の良いらの靜寂を守つて居る。マローヤ・パレスホテルはあつて居て時々あたりの空氣をゆるがすのは昔ながらの、のどかな、これは全然村と遊離してラッパを鳴らして過ぎる郵便自動車だけだ。

ヴアル・フェルニナ・グルツクスはこのオーベル・エンガデインの中心、シルス・マリーアから南方ベタを除けばあとは家が二三軒あるばかりだの可愛らしい谷で、クルツカーの生れた村より發する約一〇粁餘りがこの世にあらうとは思ひもかけなかつた。然しその美しさ、すばらしさ、こんな奇麗な所を眺めるたびに、峠を越へて行く度に、峠の空とつながるあたりい青草を一面に敷きつめて奇麗な花が咲きみだれ青い氷河と黒い岩山をその奥に持ち、小さな氣持のいゝ教會のクルスが朝な夕なのアルペン・グリューエンに金色にかゞやき、空には大きな鳥が輪を畫いて飛ぶ。こんな谷があつたとしたらどうだらう。それがこのフエツクス・タールなのだ。

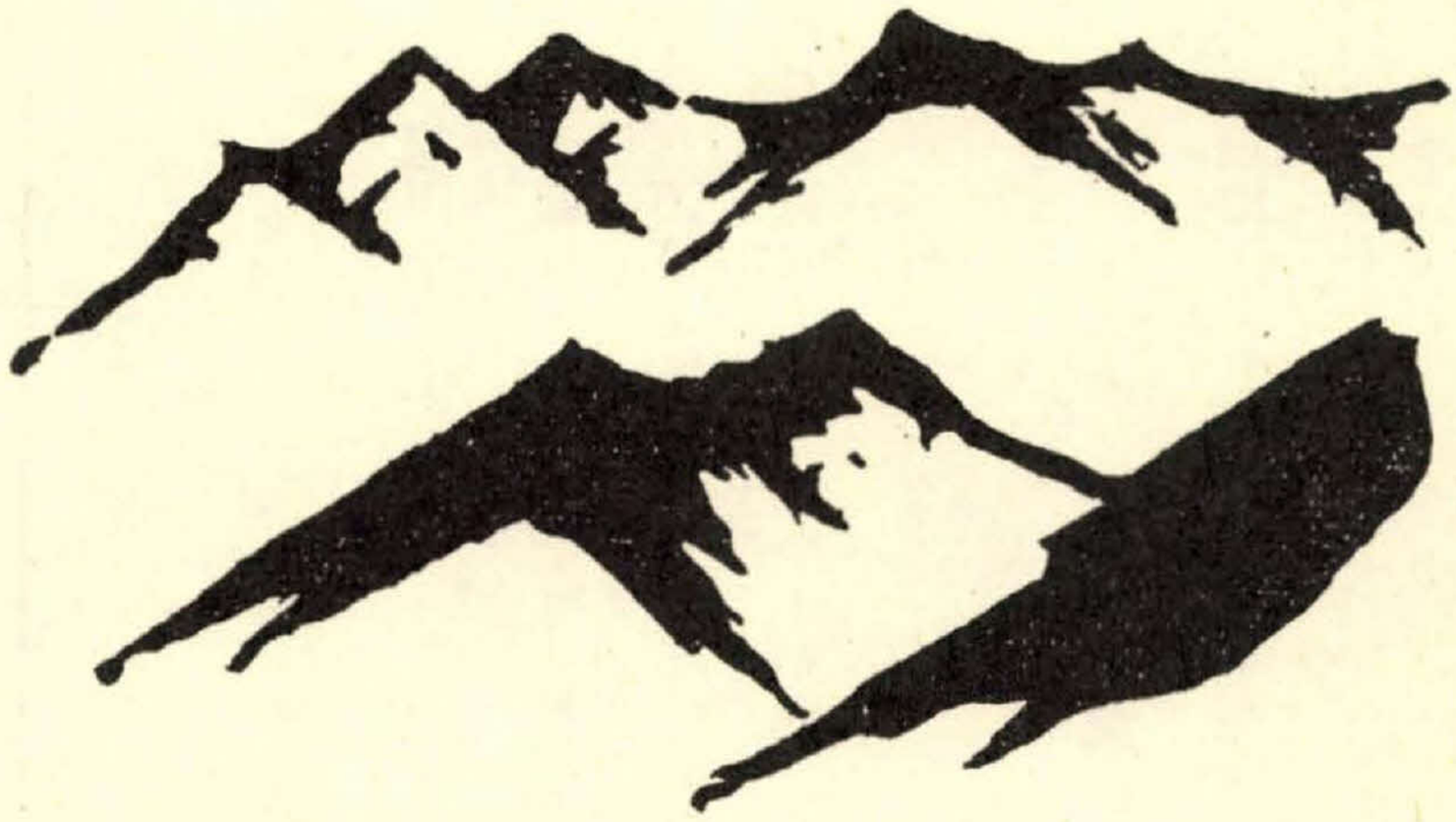
山はこの谷の盟主 Piz Tremoggia（登つたが、これも高さ三四五二米の手頃さで、氷河もオー

Maloya, Jsola, Sils, Maria, Silvaplana と村々は昔なが


ENGADINE
略図
SCHWEIZ
ITALIA
RHEIN
↑ zürich
Ragaz
Coire
Kloster
Davos
INN
Iranz
← Andermatt
P.d Aela
St. Moritz
Val Fex
Maloja
Silsersee
P. Rosegg
Bernina
Pontresina
Bernina Pass
P. Tremoggia
M. Disgrazia
Chiavenna
↓ Como & Milano

バー• ランド、ヴアリスに比べればオモチヤばかり續けた様に可愛らしい。眺めは又無類でクルツカーの Monte della Disgrazia を南にベルニナの主峰 Rosegg, Bernina, Paliiを北に背ひ、ヴアル、マレンコをはるかにソンドが出來る。又麓のクラスタにはクルツカーの家のほど近くベルリンの肖像畫家アトリエがあり、その田舍家風の無細工なホーフアーのにこのあたりの草花を畫いた繪をかざつて居る等何んとも云へない。

マローヤにはセガンチイニの墓もあり、クルツカーの作つたフオルノの小屋もある、ヴアルフオルノもこゝで金が無くなつて電報を打つたりしてまごまごし、ブレガグリアの谷をスゴイ岩山の夕日に輝くのに後髪を引かれる思ひで伊太利に下りへ横切つて Lugano, Lago di Como から Airolo へ出て歸へつたのであつたが、このオーベル• エンガデインのヴアル• フエツクスの山を見ずとも、先づこのロンドン、パリを見なくても、否、ヴアリス、オーバー• ランドに入られん事を、敢へてお願ひして少しもはゞからない氣がする。



錄　記

昭和八年

十勝岳

三、一九　雪　　奥野綱重（先輩）、堀岡清

二〇　晴　旭川——上富良野——吹上溫泉　三段山へ。

二一　吹雪　溫泉（七、三〇）——前十勝（一〇、〇〇）——十勝（一一、〇〇）——前十勝——溫泉

近來稀な天氣を一日頂戴して存分スキーが樂しめた。但し二〇日はあまりに天氣良過ぎ、雪はむしろ三段山へ行つた時の方が良かつた。（堀）

無意根山

三、二六　晴　　奥野綱重（先輩）、堀岡清

定山溪——奥無意根小舍　一〇五二、三米の頭まで行く。

二七　曇　小舍——一〇五二、三米——無意根中岳——並河岳——喜茂別岳——並河岳——小舍

ガスの爲めに無意根の頂上からぶつ飛ばす事が出來なかつたのが惜しかつた。並河と喜茂別との間のシーソーのそれ的なのは素晴らしい。脇方越を約して下る。

二八　曇

小舍―定山渓―札幌、（堀）

マツカリヌプリ

四、二　吹雪　小樽―比羅布―登山事務所、五合目迄

三　晴　事務所（八、三〇）―四合目（一〇、三〇）―頂上（二、〇〇―二、三〇）―事務所（四、四〇）―比羅布―札幌

奥野綱重（先輩）、堀岡清

二日夜から雨が降り出したので完全に諦めて居た所奇蹟的に七時頃から眞向のニセコがあらはれて來たので急に仕度して出掛る。夏道通りに登る。登るに從ひ空は晴れ、四合目では快晴となる。池のある所のコブとの鞍部直下の一五〇〇米邊までスキーを擔ぎ上げる。頂上まで雪柔く歩き難い。四合から下は絶好のザラメになつて居た。此の日は高見要君が北海道へ赴任の日だ。吾々の登りつゝあるマツカリヌプリを車窓から眺めつゝ札幌へ行つた事であらう。（堀）

奥無意根小舍行

四、八　曇

小樽―定山渓―奥無意根小舍

奥野綱重　高見要（以上先輩）、堀岡清

此の日小舍開きなので飛入的に行つたのであるが、會員集り悪く小舍開きも結局お流れの様であつた。附近に熊

出沒の報頻々。

九　晴

札幌へ下る。（堀）

十勝岳

奥野綱重、手塚晴雄、増山清太郎、（以上先輩）、
十合健二、宮川雄二郎、堀岡清、他三名、

一二、三〇　小樽――上富良野――勝岳荘（吹上溫泉より三丁位）

三一　雪　三段山へ　午後、泥流

一、一　雪　三段山へ　午後、泥流

二　雪　泥流から登り噴火口直下より引返す、

三　曇後晴　勝岳荘（九、〇〇）――十勝岳（一一、四〇――一二、〇〇）――勝岳荘（一、三〇）――上富良野――小樽

新築の勝岳荘に泊つたのだが、大き過ぎる爲めか二階は非常に寒い。泊るなら三階のストーブの眞上に限る。中茶屋まで下つて來ると富良野からトムラウシ迄の山々がすつかり晴れ渡つて居た。後立山連峯に似た此等の山々の夕焼を左方に眺めつゝ、馬橇に引つばらせて上富良野まで滑り下つた味は今でも忘れられない。（堀）

昭和九年　　奥野綱重、手塚晴雄、増山清太郎（以上先輩）、
定山渓より脇方へ　　十合健二、宮川雄二郎、堀岡清

一、五　晴　定山渓――奥無意根小舎　　増山歸京
六　晴　一〇五二米を越えて森林の切目まで、
七　晴　小舎（一〇、〇〇）――中岳（二、二〇）――脇方（四、三〇）――倶知安――昆布

中岳からは、指道標通り行かずに、無意根との鞍部まで行き鞍部から下つた。僅か二時間の下りで急な所もないが呑氣にスキーを樂しむにはよい。此の行札幌の芳賀スキー店主芳賀恒太郎氏に案内その他色々お世話になつた。記して謝意を表し度い。尚汽車の時間の都合上芳賀氏の所謂脇方の大斜面を下れなかつたのは殘念だつた。倶知安で札幌へ歸る奥野、芳賀兩氏と左右に別れ我々はニセコへ。

一、八　雪　ニセコへ
九　雪　附近で滑る
一〇　雪　昆布溫泉――昆布――登別

昆布溫泉鯉川旅館に芳賀氏の紹介で行つたのだが、鯉川の息子が中學の同窓であつたのは意外であつた。ニセコ

は吹雪の爲頂上のすぐ下で引返した。（堀）

上越國境・日光方面

昭和七年

谷川本谷溯行　七、六　晴　十合健二、他一名

上野——水上——谷川館　七　雨

滯在　八　晴

谷川——牛首——細芝澤出谷——露營地　九　晴

露營地——オジカ澤の頭——谷川岳——天神峠——谷川溫泉——水上

谷川岳　七、一〇　晴　高見要、他一名

湯檜曾——土合——西黑澤——谷川岳——天神峠——谷川溫泉——水上

越後から日光へ　一〇、一四　晴　高見要、他一名

小出——大湯——枝折峠——石抱橋——神蓼——須原口——銀山寺

一五　曇雨　銀山寺――大津岐峠――麒麟平――檜枝岐小屋

一六　雨　小屋――赤法華――焼山峠――尾瀬沼、長藏小舍

一七　雨晴　小舍――沼尻――赤田代溫泉小舍――三條瀧――歸途平滑瀧へ往復――溫泉小舍

一八　晴　小舍――燧岳――沼尻――長藏小舍

一九　晴　小舍――小淵澤田代――引馬峠路分岐點――鬼怒沼――八丁の湯溫泉小舍

二〇　晴　小舍――手白澤――湯澤噴泉塔――西澤金山――金田峠――日光湯本――馬返――歸京

鹽原より尾瀬へ

十合健二

一〇、二五　西那須野――鹽原――尾頃峠――横川――瀧ノ原

二六　瀧ノ原――中山峠――八總――湯ノ花溫泉

二七　湯ノ花――唐澤峠――木賊――小峠――小繋峠――檜枝岐

二八　檜枝岐――駒――檜枝岐――沼山峠――長藏小屋

二九　長藏小屋――三平峠――根羽澤鑛泉――大清水屋

三〇　大清水屋――戸倉――鎌田――沼田

昭和八年

奥日光スキー行

十合健二、安達泰三、中島孚、堀岡清

一、二八　雷門――日光――湯本

二九　金精峠へ

三〇　歸京

氣溫の低い割に雪質は良くない。然し東京から日歸へり地としては最上の雪質を持つスキー場であらう。

安達泰三、小橋謙三、中島孚、

守門岳

三、一三　上野――長岡（安達方）

一四　晴　長岡――栃尾――栃堀、中島屋旅館泊、

一五　晴　中島屋（九、五〇）――峠（〇、一〇――一、三五）――道院小舎付近スキー練習（二、〇〇――三、三〇）――道院小舎（四、〇〇）

一六　晴後雨　道院小舎（八、三〇）――一本橅（一〇、五五）小橋引返へス――長峰鞍部（一一、〇〇）――大岳（一二、二五）――鞍部（一二、三〇）――道院小舎（三、〇〇――四、二〇）――中島屋（六、〇〇）

一七　中島屋（一一、〇〇）――栃尾（一二、五〇――一、一八）――長岡

道院小舍の鍵は、栃尾の稻豊文具店（小學校前）にて借用す。道院小舍は燃料寢具あれど食料なし。（中）

三國峠越

四、二七　晴　　堀岡　清

湯澤（五、一二）――八木澤（七、〇〇――八、〇〇）――元橋――

二八　雨後晴　法師（八、三〇）――赤澤（一、〇〇――二、四五）此の間三國山へ――法師（三、三〇）

三國峠へも淺貝までは平凡。三國山からの谷川岳から仙之倉までの眺めは惡くない。赤澤――淺貝――三國峠（一、

ではあつたが之も惡くない。林道は雨に濡れながら

谷川岳新入生歡迎旅行

五、二八　晴後曇　　吉澤一郎、增山清太郎（以上先輩）

湯檜曾――西黑澤――谷川岳――西黑澤――湯檜曾――東京　　十合健二、安達泰三、中島孚、堀岡清、林俊介、

驚崎雄四郎、大野惠司、鷹野雄一、他二名

奥日光尾瀬と銀山平

堀岡清、林俊介、鷹野雄一

九、二二　晴　沼田（三、三〇）——仲古（四、四五——四、五〇）——戸倉（五、四〇——七、三〇）——大清水屋（一〇、〇〇）——三平峠（一二、三〇）——長藏小舍（一、一〇）

二三　晴　長藏小舍（七、一五）——檜枝岐小舍（九、一五——九、四五）——尾瀬原溫泉——三條瀧分岐點（一一、一〇）——三條瀧往復——銀山寺（七、〇五）

暗くなつてから雨となる。今年より銀山寺には泊めないことになつたと斷はられたが知人ありて一泊を許さる。十時頃暗闇の浪拜溫泉に入つたが氣持が良くなかつた。

二四　晴雲出る、銀山寺（八、〇〇）——清水（一一、〇〇——一一、三〇）——石抱（一、〇〇）——枝折峠（三、〇〇——三、三〇）——大湯東榮館（六、〇〇）

八海方面雲の中に在りて見えず。林、堀岡共に在れば必ずかくの如し。

九、二五　雨　大湯——小出——川口——上野

バスに乘り遲れ、急行に乘るべく川口へ出る。秋の頃、輕い荷で紅葉を賞でつゝあるくも亦佳きものである。

（林）

昭和九年

谷川スキー行

林　俊介

一、五　吹雪　水上（三、〇八）――谷川溫泉スキー練習

六　晴　スキー練習

七　晴　スキー練習――歸京

ゲレンデの雪質は良くない。

日光湯本溫泉先輩學生懇親スキー行

中川孫一、松木謙三、近藤恒雄、増山清太郎（以上先輩）、十合健二

堀岡清、小橋謙三、中島孚、林俊介、他五名

一、一九　吹雪　日光――湯本溫泉板屋

二〇　晴　日光――湯本――金精峠――湯本――日光。

好天氣に恵まれた良きツーアであつた。車中の乾杯も亦うれし。

越後湯澤溫泉スキー行

林　俊介

四、六　晴　上野――越後湯澤

介、他二名

四、七　晴　スキー練習
四、八　晴　スキー練習
雪べとつく。上越の山が美しかつた。

榛名山　林　俊介
五、一八　晴　上野――澁川――伊香保
一九　晴　伊香保――榛名湖畔――榛名神社――天神峠（八、〇〇）――谷川岳頂上（一〇、〇〇）――高崎

谷川岳　林　俊介
五、二〇　晴　谷川溫泉（六、〇〇）――舊道――天神峠（八、〇〇）――谷川岳頂上（一〇、〇〇）――土合――西黑澤――谷川岳（一二、〇〇）――天神峠（二、三〇）――湯檜曾（四、三〇）――土合――西黑澤――谷川岳（一二、〇〇）――天神峠（二、三〇）

谷川岳（新入生歡迎旅行）　林　俊介、小谷部全助、小林　重吉、森脇　芳之、塚本　駿、
五、二〇　晴　豫科新入生歡迎登山一行に合す。　鷲崎雄四郎、森川眞三郎、岩崎　利一、清水　慶一、佐々木　誠、他二名

二一　晴　谷川温泉（七、〇〇）——谷川岳——谷川温泉——水上——歸京

遭難しかけてゐる人を救けたりしたので、天神峠からの下りは大變時間が、かゝつた。

武尊山

六、五　曇後晴　沼田（一二、三〇）——川場湯原（一、一〇）——背嶺峠（四、〇〇）星野義情氏方宿

堀岡清、林俊介、鷹野雄一、新維二郎

朝の内曇つてゐた空が沼田に着く頃には俄然晴れて來た。武尊山の谷間は實に美しい。

六　晴　花咲（七、〇〇）——前武尊頂上（一〇、三〇）——川場湯原都屋（六、〇〇）

素晴らしい好天に恵まれて愉快だつた。期待した程雪が多くなかつたのは殘念だつた。一時近く下山し始める。

變な所に道があつて歩きにくかつた。夜行で歸らうと思つてゐたがバスが無かつたので宿る。溫泉のぬるいのには閉口した。

七　晴　川場——沼田——上野

朝出來るだけのんびりして下る。途中谷川岳が雪に覆はれて聳へてゐるのを眺めながら。旅館の氣に入つた事は大きな印象の一つだつた。（新）

上信國境方面

昭和七年　伊藤　文平、宮川雄二郎、他一名

淺間山

一〇、二一　晴

霧積溫泉――熊野神社――軽井澤――岩掛――星野――峰の茶屋――淺間山――星野溫泉

十月下旬、星野溫泉の裏手の山から雄大な淺間の噴煙を見ると、急に行きたくなつて出掛ける。ラ〳〵の道を頂を目がけて、一散にのぼる。歸りに烈風に會つて急いで退散。翌日の淺間は白く新雪をかむつてゐた。（宮）

昭和八年　吉澤　一郎、松木　謙三、村尾　金二、磯野　計藏、佐美敏夫（以上先輩）、增山清太郎、堀岡　清

神樂峯

一、一　上境——湯澤——八木澤

二　八木澤——外ノ川小舎

三　高石山へ

四　神樂峰へ、慈惠ノ小舍より上スキーによし。

五　小舍——八木澤——湯澤

此れだけ揃へば當然の事ながら、外ノ川の賑やかさは凄じい。二階が抜けなかつたゞけがもつけの幸。（堀）

岩菅山

八、一二六　中島　孚

晴　濕濕泉（五、三〇）——發電所（六、〇〇）——琵琶池（七、〇〇）——發哺溫泉（八、〇〇——八、三〇）——岩菅山頂上（一一、〇〇——一二、〇〇）——發哺溫泉（一二、〇〇——一、三〇）——熊の湯との分岐點（二、三〇——三、〇〇）——熊の湯（四、三〇）——濕溫泉（七、三〇）

神津牧場

一〇、一九　鷹野　一

雨　輕井澤（五、一五）——和美峠（七、〇〇）——初鳥谷（九、二五）——牧場小舍

二〇　雨　滞在

二一　晴　牧場（八、一五）——物見岩——志賀峠（一〇、一〇）——八風山（一一、三〇——一二、〇〇）——上發地——輕井澤（二、一〇）

折角の秋の山旅も雨で毫無しになつてしまつた。歸りには輕井澤迄、牧場のコリーが送つて來てくれた。

昭和九年　鹿澤、菅平方面

應野雄一

三、一〇　晴　田中——（自動車）——横堰——地藏峠——鹿澤

一一　晴　鹿澤——三方ノ峰——地藏峠——（湯ノ丸、途中迄往復）——鹿澤

三方の峰は展望絶好、遠く信飛國境の白銀の山々が盛氣樓の如く浮ぶ。壯嚴、絶美。歸途接濕泉へ行かうとしたが凄いウインドクラストなので戻る。

三、一二　曇後雪　鹿澤——新鹿澤——古長——鳥井峠——澁澤——菅平ホテル

鳥井峠から澁澤への下りでは、スキーが凍つた自動車の轍の上をガラ〳〵すべる。澁澤から下は雪が綺麗に除いてあつた。バスが通る爲めらしい。

一三　曇　ホテル——猫岳頂上——ホテル

雲霧去來して展望悪し。但し樹氷は綺麗だつた。登る中はよかつたが下る頃には、雪はとけてメデウムが苦労の種。半分歩いて下る。

一四　晴　ホテル――上田

雪がよくないので仙仁への豫定を變更して上田へ出る。

東京附近及富士山方面

昭和七年

大岳・御前山

六、一八　曇　小谷部全助、遠藤竹雄

一九　晴霧多し　御嶽驛（一二・〇〇）――御嶽大嶽小舍（六、〇〇）

小舍――鋸山――御前山――熱海――御嶽驛

大岳・雲取山

八、二六　霧　御岳驛――御嶽――鋸山――氷川――小河内　小谷部全助、他一名

二七　晴後霖雨、夜半豪雨　小河內――峰谷川――奥峰――甚助小舍

二八　霧　小舎――尾根――雲取頂上――武州小舎――七ツ石――六ツ石――氷川――御嶽駅

馬頭刈尾根

一一、五　晴　新宿――御嶽――御嶽神社――奥ノ院――大嶽山――馬頭刈山――光明山――軍道――五日市

宮川雄二郎、他二名

十一月上旬の日曜日、電車賃を免除された結果素晴しく安直な旅行だつた。

富士山

増山清太郎、高見要、打橋壽郎、堀岡凄清

一二、一七　晴　新宿――富士吉田――五合目小舎（六、〇〇）――七合（九、〇〇）――小舎（三、三〇）

一九　晴　小舎――吉田――新宿

十三日に降つた雪とか、自動車は雪堅く中ノ茶屋迄。三合より上は所々もぐる。風の爲めか天地ノ境から七合迄は雪なし。大澤を下るも、所々膝を沒しグリセード面白からず。（堀）

昭和八年

大岳・大菩薩峠

小谷部全助、遠藤竹雄

一、三　晴　五日市――馬頭刈山――大岳神社小舎

四　晴　大岳往復――大ダワ峠――氷川――小河内、

大ダワ峠北側は積雪一米程もあつて、急な斜面を滑りつし乍ら愉快に降つた。氷川で夜になり自動車を雇ふ。

五　晴後曇　小河内――餘澤――橋立――赤澤小舎、

餘澤で遠藤と別れる。彼は上野原へ出るのだ。

六　雪　小舎――フルコンバ小舎

妙に暖いと思つたが果して雪だ。夜の内に一尺も積もり、なほ盛んに降つて居る。フルコンバ小舎から急に雪が多くなり股迄もぐるのでウンザリして泊る。

七　晴　小舎――大菩薩峠――姫ノ湯山の家

盛に雲が飛んで星がキラ〳〵のぞく。木々の樹氷は朝日に映えて素的だ。所々の吹溜りに悲鳴を上げ乍ら山の家に降り着く。峠からの連峰を見れば誰でも快哉！を叫ぶだらう。南アルプスは全く良い。甲府盆地を一面におほふ雲海の上に、輝く白銀の連峰を見れば誰で

八　晴　姫ノ湯――賽の河原往復（スキー）――番屋――鹽山――歸京、（小）

大菩薩附近

三、七　快晴　鹽山（四、二〇）――雲峰寺――大菩薩館　小谷部全助

雲峰寺の山門をくゞる頃、東が白んで後ろに南の銀嶺が赤らみ初める。目指す山々には一片の雪も見えず失望したが降る迄待たうとスキーをかついで登る。所が、長兵衛小舍邊から樹林の下は一面雪だ。然し日當りの良い所は全然無い。ザラメになりか、つて居るので面白く滑る。殊に石丸峠へ行く途中の白樺の疎林等狹いが相當なゲレンデだ。

八　雪後晴　滯在

姫ノ湯の山家で偶然山友S氏に逢ひ其處へ泊る。

九　晴　滯在

峠の方へ遊びに行く。上の方は雪があつてもクラストがひどくて駄目だ。

一〇　晴後雪　天狗棚、狼平往復

日當りは雪皆無。狼平邊は面白いスロープだが例の如くクラストがひどく不快だ。一、二月頃の降雪直後なら相當面白く滑れるだらう。南の眺望が素的に良い。夕方、館の小僧と一緒に滑つて遊ぶ。

一一　雪後晴　滯在

新雪尺餘、喜んでスキーをはいたが深過ぎてよく滑らぬので止める。雲が飛んで晝頃から氏の鐵砲を借りて小僧と一緒に鳥打ちに行く。連れて行つた駄犬が禍して散々の不獵だ。然し鐵砲かついで靜かな雪の中を彷ふのも悪くないと思つた。

一二　晴　峠往復、歸京。（小）

川苔山

堀岡　清

六、四　晴　立川——御岳——獅子口小舍——川苔山——棚澤——御岳

景信山

鷹野　雄

六、四　晴　淺川（一二、〇〇）——小下澤——景信山（一二、三〇）——小佛峠（一二、五〇）——淺川（四、〇〇）

小下澤は、東京に近い割に人の行かぬ靜な處だ。早春の候、又は新綠薫る五月晴れに、一日を割いて此の澤を訪れるのも無駄ではあるまい。

御岳。大岳方面

鷹野　雄　他一名

六、一〇

一一

晴　御岳驛（三、一五）——本社——七代瀧、天狗岩——奥院（四、〇〇）——大岳神社——頂上——茶屋（五、三〇）

晴　茶屋（六、〇〇）——御前山（八、三〇）——鋸山（七、〇〇）——御前山（八、三〇）——神戸岩（一一、三〇）——五日市（三、〇〇）

大岳頂上でのその日の出は綺麗だつた。東京灣から江の島まで見えた。大岳から御前山への尾根の漫歩は四、五月に限る。六月は暑い。

三ツ峠岩登練習　堀岡　清、宮川雄二郎、望月　達夫、鷹野　雄一

七、二

晴　大月——小沼（三、三〇）——三ツ峠、岩場——茶屋（一二、〇〇）——三〇）——モーターボートで船津へ——河口村（二、

七、二

大菩薩嶺　小谷部全助、遠藤　竹雄、他一名

晴　鹽山（四、二〇）——番屋（五、〇〇）——唐松尾根——大菩薩嶺（九、〇〇）——峠——番屋（二、三〇）——吉田——歸京

仙元峠・川乗山　十合　健二、宮川雄二郎

一〇、七　晴　新宿——御嶽——（乗合自動車）——氷川——日原

一〇、八　晴　日原——一杯水——仙元峠——川乗山——棚澤——御嶽

氷川から夜道で九時半頃日原に着き、一風呂浴びた氣分は素晴しかつた。宿から少し元へもどつて、急勾配を暫く、とると、後はゆるやかな細道、十月の秋晴れと紅葉を滿喫して、かさ〳〵と鳴る落葉を踏みしだきながら氣分を味つた。仙元峠は低くて川乗山からみると蔭になるが、一杯水の突起は明瞭に分り易い。（三宮）

富士山

堀岡　清、中島　孚、鷹野　雄一、小谷部全助、他一名

一二、三　晴　吉田——五合目、池谷小舍

四　晴　小舍（六、三〇）——頂上（一二、三〇——一、三〇）——小舍（三、風強し、屏風岩へ

五　晴　風強し、下山の途中二合目にて先輩手塚晴雄氏に會ひ堀岡のみ再び五合目へ

六　晴　小舍（七、〇〇）——八合（一〇、三〇）——頂上（一一、三〇）——観測所（一一、四〇二、三〇）——劍ケ峰（一、〇〇）——吉田口頂上（二、〇〇）——小舍（三、一五）

七　晴　小舍——吉田——歸京

七日は登るに從ひ風柔ぎ頂上では風速二米、測候所の前で裸で晝食なんて十二月には一寸出來ない事であらう。

劍ゲ峰からの南の大觀は素晴しかつた。眞に展望臺の名に背かぬ。（堀）

昭和九年　　小谷部全助、森脇　芳之、望月　達夫、齋藤　正治

富士山

三、七　晴　吉田――馬返――五合小舍

馬返迄、バスはゆかぬとの事で、早曉の吉田をうろつきやつとハイヤーを出させる。運轉手に佐重への言傳を賴み、彼の來る迄と一緒に白樺ゲレンデへ滑りに行く。今年は雪が少く數が出て居るが面白くない。ゲレンデは相當面白くないのである。佐重の弟と一緒に白樺ゲレンデへ滑りに行く。今年は雪が少く數が出て居るが面白くない。ゲレンデは相當面白くないのである。佐重が來ぬので弟と登り小舍に落付く。例年なら五尺以上も積ると言ふのに今年は二尺あるか無いかの心細さだ。登山道で滑つて遊んで居る内佐重が鷄を下げて登つて來る。

三、八　曇雪　滯在

登頂の積りで早起したが天氣惡く中止。齋藤を迎へに馬返迄、ゲレンデ傳ひに滑降する。仲々良いスロープが續いて居るが雪不足の爲、まだ快的と言ふ程ではない。齋藤來らず、又五合目迄引返す。

三、九　晴　七合半往復

六合の三角點附近は夏の樣に雪皆無。だが七合以上は物凄い氷雪の世界だ。去年の暮に較べると雪が遙かに固く

凍り、殆ど白氷の狀態である。強風の猛撃と時刻の關係上退却と決め大澤を降る。齋藤來る。

三、一〇　晴　八合往復

風は昨日以上烈しい。息や鼻汁はスキー帽の垂れにバリ〳〵に凍りつき睫は眞白になる。七合半から八合に到る氷に近い急斜を烈風に抵抗し乍ら登り、空いて居る小舍に這入つて風を避ける。凄い寒氣で、指端がしびれて氣味が惡い。更に頂上へ突進すべくアンザイレンして出發したが息もつかせぬ烈風に危險を感じて退却、又大澤に風を避けて降る。

三、一一　快晴　五合——馬返——吉田——歸京（小）

小金澤連嶺縱走

森脇芳之

四、二三　曇、初鹿野驛（三、四五）——田野鑛泉（四、二五）——燒山——湯ノ澤峠（七、三〇）——黑岳山（八、〇五）——牛奥ノ雁腹摺——小金澤山（一〇、一五）——天狗棚山——石丸峠（一一、二〇）——大菩薩峠（〇、一〇）——大菩薩岳（一、〇〇）——長兵衞小舍——番屋（四、二〇）——鹽山（五、四三）——歸京

丹澤山塊縦走

四、二七　小林重吉、森脇芳之、他二名

花曇　淺川驛（〇、四九）——中村（二、〇〇）——青野原（三、二〇）——焼山（八、〇〇）——キビガラ山——ヒメツギ原（九、〇〇）——蛭ケ嶽（一一、五〇）——鬼ケ岩——不動ノ峰（二、〇〇）——丹澤山（二、四〇）——塔ケ岳（三、三〇）——大倉——澁澤驛（六、二三）——歸京

秩父方面

昭和八年

雁坂・十文字・信州の三峠

堀岡清、林俊介

一〇、一九　雨　鹽山（四、一五）——上荻原（七、三〇——九、〇〇）——廣瀬（一一、〇〇）、林道中澤事務所泊

一〇、二〇　雨　廣瀬（八、三〇）——ナメラ澤（一〇、〇〇——一〇、三〇）——峠の下（一一、三〇）風雨激しき爲戻る。（戻る）——廣瀬（五、三〇）

一〇、二一　晴　廣瀬（八、〇〇）——ナメラ澤（九、〇〇）——雁坂峠（一一、〇〇——一二、四五）——孫四郎峠（一二、三〇）——荒川小舍（一、三〇）——柳小舍（三、三〇）

ナメラ澤より少し行つて道は右の尾根に登る。一帯に道は荒れて居る。

一〇、二二　晴　柳小舍（七、三〇）——大瀧奥林道——栃本分岐點（一〇、五五——一二、一五）——梓山、白木屋（一三、一五）

戰場ケ原の紅葉（もみぢ）は全く何と云ひ様もない程良かつた。雪が積ればスキーに適しさうな山容である。

一〇、二三　曇　梓山（八、〇〇）——原牧場小舍（一一、三〇）——信州峠（一、〇〇——一二、一五）——十文字峠（二、三、〇〇）——増富溫泉、津金樓（四、〇〇）

和田峠からは南の方甲斐駒、鳳凰及秩父の山々殊に瑞牆山が良く見えた。氣持の良い峠である。

一〇、二四　晴　増富ラヂウム泉（九、〇〇）——八巻——韮崎——新宿

今日はお山は晴れる。

亦仲々親切。八ケ嶽と駒が良い。柿は後を引く、八巻で食つた燒酎出は無慮數十。（林）

昭和七年

扉峠と蓼科牧場

八ケ岳方面

林　俊介

七、二九　晴　赤倉――田口――松本――湯ノ原溫泉
七、三〇　晴　湯ノ原溫泉（八、〇〇）――扉鑛泉（一一、〇〇）――扉峠（一、四〇）――和田村――（自動車）――長久保新町

七、三一　晴　校外運動
長久保新町――大澤――笠取峠道――雨境（甘酒）――蓼科牧場――東京高等師範附屬中學桐蔭會寄宿舍

八、一　晴　滯在、牧場の中の小川を堰止めて岩魚を捕へたり、山羊と角力をとつたりする。

八、二　晴　寄宿舍――鳴石――甘酒――芦田村――（自動車）――大屋――上野

昭和八年

霧ケ峰スキー行

林　俊介、他一名

一、三　晴　上諏訪――霧ケ峰

一、四　晴　スキー練習

一、五　晴　霧ケ峰――上諏訪

今年始めて開けたスキー場。滿員客止めの賑ひ。雪は良い。

残雪の蓼科山

打橋壽郎、宮川雄二郎

五、四　茅野——瀧ノ湯

五　瀧ノ湯——峠道と分れる——蓼科山——大河原峠——瀧ノ湯

六　瀧ノ湯——歸京

前日の降雨にゆるんだ雪が五月の初旬だとはいひながら膝を没する迄に沈むのにはフンちやんと二人で仲々苦労した。夏道を途中で見失つてから、木の枝につかまつて底知れず陥没する腐雪と闘ひながら、二人ともすつかりベソをかいた上、頂上がガラ〳〵の石ころには文句もなかつた。白黒に粧つた八ケ岳が青空にくつきり見えるのみ、歸へつてからフンちやん餘憤を瀧ノ湯の溫泉プールにしぶき飛ばす。（宮）

冬の八ケ岳

昭和九年

小谷部全助、齋藤正治

一、三　小雪

一、三〇）——柳澤（八、三〇）——製板小舍（二、一五）——赤岳鑛泉（四、一〇）

組原に掛る邊からスキーをはく。八ケ岳方面は暗々たる雲に包まれて皎々の勇姿をしのぶべくもなかつた。製板

小舍から樹林となり雪質もグツとよくなる。ウドン粉の様な粉雪でラツセルも樂々と氣持よく進む。鑛泉は標高二千米を越える高所に位置する爲寒さも非常に烈しい。室内で零下五度から十度は普通ださうだ。

一、四　小雪　偵察。

猛烈な寒氣だ。部屋の中でも、素手でワツクスなんか塗つて居ると指先が痛くなつて來る。行者小舍迄一時間足らずの行程。積雪で夏途は全然わからぬ。八方偵察の結果中岳、アミダの鞍部へ達する澤を見附けて其處をつめる。溪流は積雪の下に眠り、澤一面絶好のゲレンデだ。間もなく二分する澤の向つて右をとり、ぐん〳〵登ると中岳から一直線に落ちた壘々たるデブリに逢着し、急に憶病風に見舞はれて廻れ右をして引返す。雪質はよく緊つた粉雪だ。滑る々々、凄いスピードに恐れて吾知らず倒れると後ろからSは音もなく側をかすめて彼方へ姿を消して了ふ。行者小舍の附近で暫く滑つて遊ぶ。美濃戸乘越から鑛泉迄の林中滑走も面白い。適當な傾斜と素的な雪質で、存分に滑降を樂しむ事が出來た。

一、五　晴　雲霧多　鑛泉（七、五〇）——行者小舍（八、三〇）——中岳、アミダのコル（一〇、一〇、シーポ）——中岳（一一、〇〇——一二、〇〇）——赤岳頂上（一、一五、——二、〇〇）——デポ（二、一五——三、〇〇）——鑛泉（四、三〇）

どん〳〵雲が飛んで青空が擴るので、斷然張切つて行く。眞白なタンネの森をすかして赤、横の物凄い岩壁が矗々と聳立して居るのを見て、ふとチロールの或る山の寫眞を想ひ出した。昨日見たデブリから澤は俄然急になつて困

難したが間もなくデグザグが切れる程廣くなり樂に鞍部へ着き、其處をデポとする。鋭い雪のナイフリッヂが延々と中岳迄續いて居る。中岳ではあまり眺望が良いので寫眞をとつたり等して一時間も伸びて了ふ。遠望は高まつた雲海で駄目だが、赤、横、アミダ、權現は紺青の空に皎々と輝いて凄い程の美しさだ。赤岳の登りにかゝる頃霧が巻き始め、絶頂の眺望を樂しむ事は出來なかつたが最高峰に登り得た事に滿足して降る。時々、霧間に夕陽を浴びて現はれる赤岳の雪陵が壯嚴だつた。

一、六　快晴　鑛泉——行者小舍——赤岳岩壁直下——行者小舍——南澤——製板小舍——茅野——上諏訪。

八時、輪カンをつけて峰の松目の鞍部指して出發したが夏途わからず斷念して鑛泉へ引返し荷をまとめて行者小舍へ行く。其處から南澤をつめて岩壁下をデポにしたが時間遲く、且赤岳迄は難場續きらしいので暫く伸びて引返す。行者小舍迄一滑りだ。更にその儘南澤を滑降。カリ〳〵のクラストだが長い裾野の滑降も愉快だ。阿彌陀の峰頭が何時迄も赤く夕陽に輝いて居た。夜半、上諏訪へハイヤーを驅る。（小）

霧ケ峰

一、七　快晴　上諏訪——清水平——池のクルミ——車山——カボツチヨ山——池のクルミ——清水平——上諏訪

小谷部全助

池のクルミの直ぐ下迄バスが通ふので樂だ。上天氣で素晴しい眺望だ。富士、南北アルプス、上州の山々、及び昨日迄居た八ケ岳連峰等ぐるりと取巻いて曾遊の思出に耽らせる。山を眺めながら伸びるに好適な所である。

妙高山・火打山方面

昭和七年　　林　俊介、他二名

關、燕溫泉スキー行

一、三　晴　上野――新井町、金谷山に雪無し。
一、四　晴　新井――關山――關溫泉
一、五　晴　關――燕溫泉――關
一、六　晴　關――赤倉溫泉――田口――上野。

野尻湖畔天幕生活

七、一七　雨　上野發夜行　　林　俊介、他六名
七、一八　雨後晴　柏原――野尻――モーターボート――土ケ崎――幕營地（外人村東方森林中）

七、一九　晴　滞在
七、二〇　晴　滞在
七、二一　晴　滞在
七、二二　晴　幕營地（五、三〇）——柏原——軌道——營林署苗圃——黑姫山々頂（一二、〇〇——一、〇〇）——柏原——幕營地（七、〇〇）
七、二三　晴　滞在
七、二四　晴　幕營地（四、三〇）——柏原——二ノ倉——雲善寺——鐵鑛泉（一一、三〇——一二、〇〇）

——飯繩山——鐵鑛泉——吉田——柏原——幕營地

水が無いのに苦しんだ。

地圖の鐵鑛泉は無く炭酸泉とあるのが鐵鑛泉である。登山道の入口には木標が立つてゐる。

く時間がなかつた。

七、二五　晴　滞在
七、二六　晴　幕營地——管川——峠——管川——幕營地
七、二七　晴　幕營地——外人村——野尻——田口——赤倉
七、二八　晴　赤倉ホテル滞在
七、二九　晴　赤倉（一二、三〇）——妙高山頂（五、三〇）——赤倉（九、〇〇）

道に迷つて頂上へ行

暑いので夜明け前に登る。頂上の眺めはけだし壯觀であつた。こゝに一同十數日に亘るキャンプ生活の幸を祝ふ、野尻湖畔はキャンプ地として申分ない。水泳も出來る。

昭和八年

戸隠山スキー場視察

中島孚

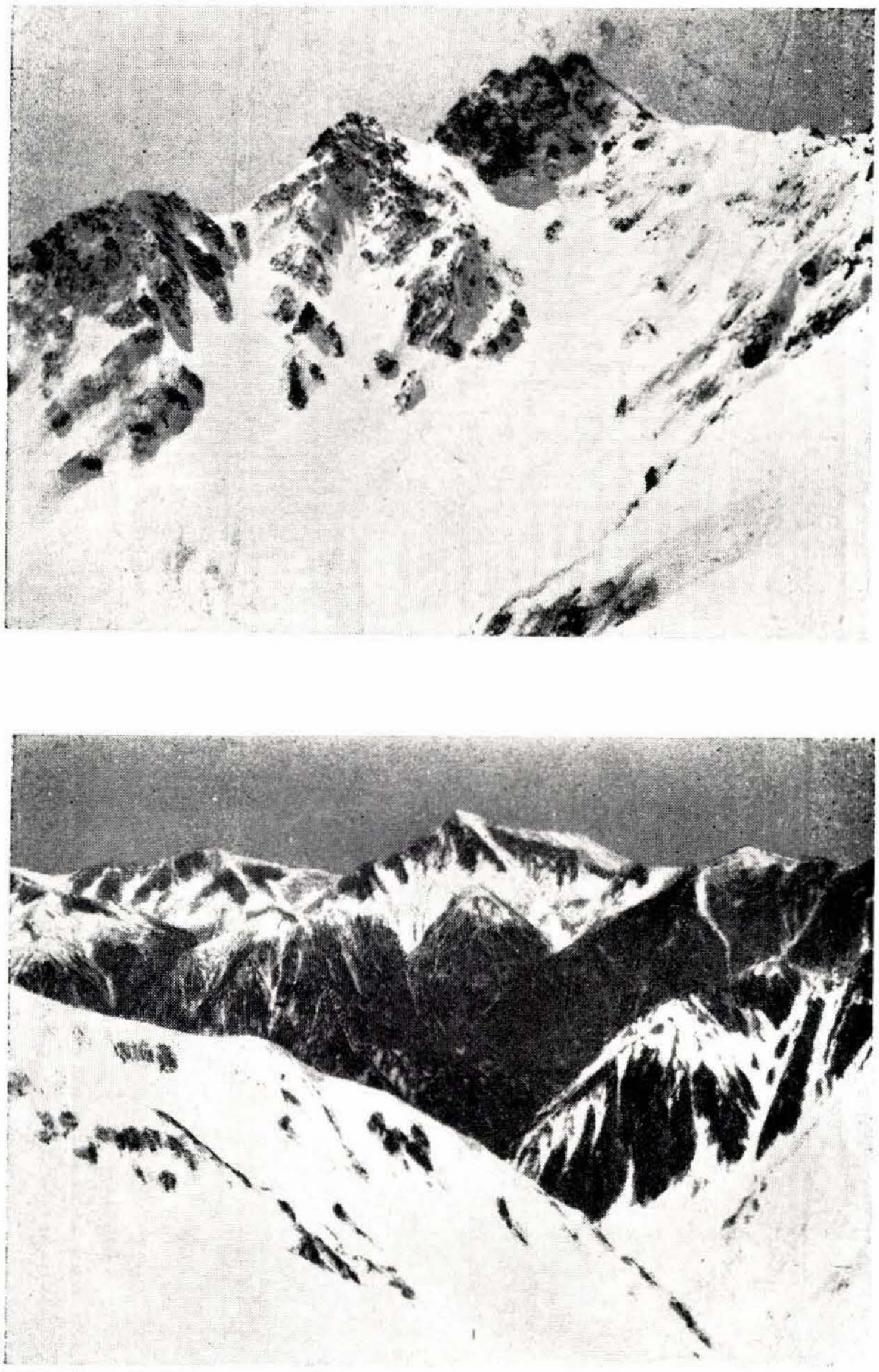
八、二五　晴夕立　西長野（七、〇〇）——飯縄原一ノ鳥居（八、五〇）——大久保茶屋（九、三〇）——社（一〇、二〇）——奥社（一一、四五）——不動（三、一〇）——一不動澤（四、〇〇）——牧場（四、三〇）——中社（五、一〇）——鳥居（六、二〇）——荒安（八、〇〇）——一ノ鳥居（九、〇〇）——西長野（九、〇〇）

飯縄原にはスキー場として小舍も今年から出來た。標高は約千米。去年の三月、及十二月にも此處を訪問したが何れも雪は少なくスキーは不可だつた。スロープも餘り優れては居ないが、飯縄山の方へ行つたら良好なスキー場が發見されるだらう。戸隠の方にはスキー場としてのスロープはない。

北アルプス



五月の明神岳　　堀岡清



（上）前穂北尾根
（下）常念岳

堀岡涛

昭和七年

白馬・唐松岳

加藤安吉、他一名

七、一二　晴　二俣——猿倉——白馬尻——葱平——雪渓——頂上小舎——鑓ケ岳——奥不歸岳——唐松岳——唐松小舎

一三　雨時々晴　葱平——白馬頂上小舎

一四　曇　頂上小舎——鑓ケ岳——唐松岳——唐松小舎

一五　曇　小舎——八方池——四ツ谷

立山

鈴木英雄、十合健二、堀岡清

七、一四　晴　千垣——藤橋——稱名小舎

一五　曇　稱名小舎——追分——地獄谷——別山乗越小舎

一六　一七、一八、一九、　風雨、滞在

二〇　平へ行く堀岡と別れる、小舎——稱名

二一　稱名——千垣——富山——猪谷——船津

二二　船津——平湯——安房峠——上高地

七月中旬の雨にたゝられて立山、劔へは行かれず乗越小舎から引きかへして自動車で船津へ行き上高地へ入る。

針ノ木峠、平行　　加藤安吉

七、一六　雨　大町——大澤小舎
一七、一八　雨滞在
一九　雨　小舎——針ノ木峠小舎
二〇　雨　滞在
二一　晴　針ノ木岳往復、小舎——平小舎　以下東澤へ

立山越、平行　　堀岡清

七、一九　風雨　別山乗越小舎——雄山——室堂
二〇　雨　室堂——浄土——龍王——ザラ峠——刈安峠——平小舎　以下東澤へ

黒部東澤溯行　　堀岡清、加藤安吉

七、二一　晴　平小舎滞在

七、二二　晴　平小舍（六、一五）——南澤出合——烏帽子道と分れる（八、三〇）——黒部右岸で幕營（五、三〇）

三〇

二三　晴　幕營地（八、一五）——東澤へ入る——幕營地（一、三〇）

二四　晴　幕營地（七、〇〇）——三ノ澤——鯱小舍（三、〇〇）

二五　晴　小舍（七、〇〇）——東澤乘越（一二、三〇）——三俣連華小舍（五、三〇）

二六　晴　小舍（六、三〇）——槍肩（二、三〇）——上高地（一〇、三〇）

南澤から東澤へ抜ける道があると言ふ遠山の言葉を信じて行つたのが運のつき非常に損をした。黒部に沿うた道も日電の工事が濟んでからは手入せず荒れてゐる。二人とも足を痛め出來る丈ゆつくり歩いた。（堀）

穗高生活

望月達夫、他三名

七、二一　晴　松本（七、〇二）——中ノ湯（九、四〇——一〇、〇〇）——上高地（一一、〇〇）——牧場（三、〇〇）——横尾岩小舍（六、〇〇）

二二　晴　岩小舍發（六、一五）——唐澤——池ノ平着（一〇、〇〇）

午後北尾根五、六峰間の雪溪にてグリセード練習。舊知の案內人上條孫人に遇ひ、池ノ平滯在中色々世話になつた。

二三　晴　北尾根行

テント發（七、〇〇）——北尾根五、六峰間のコル（八、〇〇）——五峰（九、〇〇）——四、三峰間のコル（一一、四五——〇、三〇）——前穂高頂上（一一、〇〇）——頂上直下の雪渓のツメ（一、四〇）——テント歸着（一、四〇）

未知の岩場なので相當愼重に登る。三峰からが岩登と云へば云へるが概して面白くない。ザイルは使用せず。

七、二四　晴　ジャンダルム行

テント發（七、三〇）——穂高小舍（九、三〇）——奥穂高頂上（一〇、四〇——一一、〇〇）——奥穂高（〇、三〇）——小舍（一、三〇）——奥穂高頂上（一一、四五）——奥穂高（〇、三〇）——小舍（一、三〇——一一、〇〇）——

「驢馬ノ耳」の手前のコル（一一、三〇——一二、〇〇）——テント歸着（三、一五）

「驢馬ノ耳」の手前まで落石の爲、足を痛めたりしてたので、引返へす事にした。

二五　晴　グルツペの一人が昨日北尾根で落石の過勞と、休養、グリセード練習。

二六　晴風　北穂高行

テント發（七、〇〇）——穂高小舍（九、〇〇）——唐澤岳（九、二〇）——北穂高の一ツ唐澤よりのピーク（一一、三〇——一、〇〇）——此のピーク直下の雪渓のツメ（一、一五）——テント

歸着（二、三〇）

北穗高側陵の側の雪渓はグリセードに好適。實に愉快であつた。

二七　晴風　ジヤンダルム行

テント發（六、四〇）——穗高小舍（八、四〇）——第二、第三峰間のコル（〇、二〇）——第二峰（一、五〇）——第一峰（ジヤンダルム）頂上（二、三〇——一二、〇〇）——飛驒尾根（四、四五）——小舍（五、一〇）——穗高（四、四〇）——奥穗高（一〇、〇〇）——ジヤンダルム頂上

飛驒尾根は音に聞く程惡場でもない。リツデ通りに登れば相當面白いが、リツデをはづしてはサウンドであるから氣持は良い。ザイルは全部使用。

二八　晴　テント發（七、三〇）——上高地（一二、〇〇——二、〇〇）——中尾峠——穗高溫泉ノ湯（四、〇〇）——

歸京

槍平、穗高縱走

高見

八、二　上高地——中尾峠——穗高溫泉

三　溫泉——槍平小舍

七　槍平　槍肩ノ小舍

六　風雨滯在

五　肩——南岳——北穗——穗高小舍

四　小舍——涸澤を下る——上高地

第一次　上高地ベースキヤムプ日誌

七、二三　船津より安房峠を越えて鈴木、十合來る。玄文澤の例のところに天幕を張る。

二六　三俣連華から一氣猛烈なガンバリ振りを見せて東澤を終へた堀岡、加藤來る。

二七　わからず清水屋泊、一說によれば清水屋滿員の爲女風呂場を一夜の床としたそうな。

二八　高見、名古屋より來たる。

二九　鈴木歸京

三〇　高見、十合、堀岡、加藤、前穗へ、加藤足をいため途中より引返へす。

三一　十合、加藤歸京、高見、燒へ

八、一　高見、堀岡霞澤左股より三本槍へ登る、歸途堀岡大事なピツケルを折つて意氣沮喪察するに餘りあり滯在、清水屋に來た「針葉樹」第六號をむしやぶり讀む。

二　天幕をたゝみ堀岡歸京、高見中尾峠を越へて穂高溫泉へ。

涸澤池ノ平生活

増山清太郎、清水達雄、吉澤松次郎、太田又一

八、一二　晴　上高地――横尾――涸澤池ノ平幕營

一三　晴　池ノ平――北穂――唐澤――穂高小舍

一四　晴　池ノ平――五、六峰ザツテル――前穂――奥穂――穂高小舍――池ノ平へ落ちる澤を登る。

一五　晴後雨　太田歸京、清水、増山、吉澤ジヤンダルムへ行くも雨の爲引返し、穂高小舍泊りを餘儀なくさせられる。

一六　穂高小舍――池ノ平天幕地――横尾――上高地

乘鞍・御岳山麓行

増山清太郎

八、一七　上高地――平湯

一八　平湯――駄吉――九藏

一九　九藏――上ケ洞

二〇　上ケ洞――十三曲峠――長峰峠――西又

二一　西又――福島

夏も終りに近づいたので、その國に特有な地藏様と豊かに流れる渓流と玉蜀黍の味を求めて、飛驒の國に越えて行つた。

十三曲峠と長峰峠は御岳を眺める爲に作つたやうな峠じの山里――越中の有峰が飛驒の感じがするやうに――であつた。二つの峠に挟まれた日和田は飛驒にありながら木曾の味が俄然不味くなり空と水が濁つてくるかはりに、香の高い蜂蜜があり、土の色が美しい。あてどもなくさまよつて、さて歸らうと思つた頃には御岳の白い着物の通り路に近くまで來てしまつてゐたが汗と同乘の光榮を有した。

第二次　上高地ベースキヤムプ日誌

八、六　増山、清水、太田、吉澤（松）來る、雨のため天幕張れず清水屋に泊る

七　玄文澤に天幕張る、午後高見穂高小舍よりひよつこり來る。

八　一同西穂へ

九　明神池へ散歩

一〇　高見歸京、増山、清水、吉澤、太田霞澤左股へ行くも三本槍より少し下で引き返へす。

一一　滞在二日。

一二　涸澤へ下り下り天幕をたゝむ、吉澤、清水歸京、増山ひとり平湯へ。これで今年の上高地のキヤムプもさゝやかに終る。

昭和八年　　森脇芳之、塚本駿

白馬より上高地

七、一一　晴　新宿驛發（四、四〇）鹽尻行

七、一二　晴　四谷（九、五三）——二股（一〇、二〇）——白馬尻小舍（一、四〇）——村營小舍（六、三〇）

七、一三　曇　村營小舍——頂上（七、三〇）——杓子岳——白馬鎗——中背山——祖母谷溫泉（七、〇〇）

七、一四　曇雨　祖母谷溫泉（七、〇〇）——欅平釣橋——猿飛——坊主小舍（二、〇〇）

七、一五　曇　坊主小舍（七、三〇）——北仙人山——池平小舍（二、〇〇）

七、一六　豪雨　池平小舍泊

七、一七　曇　池平小舍（八、〇〇）——北俣——二股——眞砂澤小舍（一一、〇〇）——劒澤小舍（二、

七、一八　快晴　劔澤小舎（八、二〇）——別山尾根——劔岳（一一、三五）——別山尾根——劔澤小舎（三、〇〇）

七、一九　晴　劔澤小舎（七、〇〇）——劔ケ御前小舎——眞砂岳——大汝山——雄山神社——浄土山——ザラ峠（二、四〇）——五色小舎（三、〇〇）——蔦山——越中澤山（四、二〇）——スゴ小舎（五、一〇）

七、二〇　晴　スゴ小舎（〇、一五）——間山——岩井谷頭——藥師岳（二、五〇）——太郎兵衛平——上岳小舎（五、〇〇）

七、二一　晴　上ノ岳小舎（五、〇〇）——北俣岳——黒部五郎岳（九、〇〇）——三俣蓮華岳（一一、四〇）——双六小舎（一、一五）

七、二二　晴　双六小舎（五、〇〇）——西鎌尾根——槍ケ岳（九、三〇）——一ノ俣小舎（一一、四〇）——上高地（三、〇〇）

七、二三　晴　燒岳往復

七、二四　晴　上高地キャンプ地——中ノ湯——松本——歸京。（塚）

燕●槍●穂高縦走

宮川雄二郎、佐々木誠、岩井欣五

七、一五　曇　有明――一ノ瀬――中房

七、一六　曇後雨　中房――燕山荘

七、一七　晴　燕山荘――喜作新道――西岳小屋――天上澤乗越の一つ手前の鞍部より下る――槍澤小舎（岩井と別れる）――肩の小舎

七、一八　晴　肩小舎――南岳――北穂――穂高小舎

七、一九　晴　小舎――奥穂――前穂――上高地

賑かなお山道中に期せずして同中學の三人が集つたので氣分が若返つた。燕山荘邊で岩井が山酔のためか胃腸を害し相當苦澁したがよく頑張つてくれてうれしかつた。肩ノ小舎で本科、豫科、専門部の各パアテイが落合つたので合流して穂高縦走をした。（宮）

槍●穂高縦走

望月達夫、遠藤竹雄、鷲崎雄四郎、他二名

七、一七　晴　上高地――一俣――槍肩

一八　晴　槍肩――北穂高――唐澤岳――穂高小舎

一九　晴　穂高小屋（八、〇〇）――奥穂高――前穂高――岳川谷――上高地（四、一〇）

槍ケ岳までは村尾先輩と一緒。肩では掘岡班、宮川班と落合つて賑かだつた。（望）

槍・穂高縦走

掘岡　清、鷹野雄一、杉浦亮、大野惠司
齋藤正治

七、一七　晴　上高地——一俣——槍肩
一八　晴　村尾先輩、杉浦、望月、鷹野、堀岡午前中小槍へ　肩（一一、一五）——北穂（五、〇〇）——穂高小舎（八、〇〇）
一九　晴　小舎（八、〇〇）——ジャンダルム（一〇、〇〇）——天狗澤（一一、三〇——一二、三〇）——上高地（四、〇〇）

霞澤三本槍

堀岡　清、鷹野雄一、杉浦亮、望月達夫
齋藤正治、遠藤竹雄

七、二一　晴　上高地テント（八、〇〇）——左俣——三本槍（二、〇〇——二、三〇）——上高地（五、

燕・常念岳

十合健二、中島孚

七、一一　晴曇後夕立　松本（一〇、五三）——有明（二、四五——二、五五）——一野瀬——信濃坂——中房温泉（三、四五）

二一一　晴夕立雷　中房（六、五〇）——合戦小舎——燕山荘（一〇、二〇——一一、二〇）——燕岳（一一、四〇）——燕山荘（三、〇〇）——常念小舎（四、三五）

二三　晴　常念小舎（六、三〇）——常念岳（七、〇〇）——蝶ケ岳（一〇、三〇——一一、〇〇）——上高地ベースキャンプ（五、三〇）——大瀧山（一、三〇）

岳川より奥穂へ

七、二三　晴　上高地キャンプ——丸西（七、〇〇）——岳川雪渓二股（九、〇〇——九、三〇）——コブ尾根瀧下（一〇、〇〇——一〇、三〇）——縦走路ト合ス（一、三〇）——穂高小舎（三、〇〇）——涸澤——上高地（七、〇〇）

堀岡清、鷹野雄一、杉浦亮

右へ巻き過ぎた爲め奥穂の頭よりは前穂寄りの方に出た。此の路はつまらない。（堀）

唐澤行

七、二八　晴　上高地――徳澤――横尾――唐澤池ノ平
二九　晴　池ノ平――穂高小舎――奥穂――ジャンダルム――池ノ平
三〇　曇雨　滞在
三一　晴夕立　池ノ平――上高地

奥又白

七、二九　晴　上高地キャンプ――西糸屋（七、三〇）――嘉門次小舎（八、四五）――奥又本流、左の涸澤出合（一一、三〇）――澤をつめて尾根へ出る（三、三〇）――池ノ平（案内）　堀岡　清、杉浦　亮、上條孫人

三〇）――奥又本流――前穂（一二、三〇）――北尾根四、五の鞍部（二、一五）

奥又の本流が左折して居る處から左へ草付の中に入り下流へもどり氣味に尾根を一本越すとチョロ水の澤に出る。澤の入口は大きな岩である。此の澤をつめて登れそうになくなつてから右へ取付き尾根へ出て少し數をくゞると奥又の瀧の上部の廣いガラガラに出る。此處から池までは樂である。

七、三〇　曇後雨　池（九、三〇）――奥又本流――前穂（一二、三〇――一、〇〇）――池（三、五〇）

北尾根を雹混りの雨にやられながら歩いた。四、五の鞍部より奥又へ下つてゐる澤は雪がつまつてなければ相當惡そうである。歸つて見るとテントが完全に浸水して居たのには弱つた。

七、三一　晴夕立　嘉門次小舍（二、四五）——上高地池（九、〇〇）——下又本流（一〇、三〇）——ヒヨウタン池（一二、〇〇——一、〇〇）

孫人が夢見が惡いといふので豫定を繰上げて歸る事にする。結局前穗、明神の裾歩きに終つてしまつた。（堀）

上高地ベースキヤムプ日誌

七、一四　晴　望月、鷹野、鷲崎、杉浦、郡司、遠藤、村田、堀岡、松本より來る、玄文澤に天幕を張る、一同元氣づく。

一五　雨　河童橋へ散歩。

一六　雨　齋藤來る、夕方突然先輩村尾金二氏の來訪あり。羊羹のお土産に一同午後村尾氏來訪、清水屋からの握飯を戴く、專門部、豫科生各一組づつ來るもテントに入らず。

一七　晴　望月、遠藤、鷲崎、村田、郡司、午前八時槍へ、十一時、大野來り齋藤、杉浦、鷹野、堀共に先發隊の後を追ひ槍へ。

一九　晴　後四時、堀岡、鷹野、齋藤、杉浦、天狗澤より歸幕。望月、鷲崎、村田、遠藤、大野、郡司、佐々木、岳川を經て歸幕。阿部（部員外）來る。

八、

二　一　三一　二九　二八　二七　二六　二五　二四　二三　二二　二〇

晴　遠藤獨り焼へ

晴　堀岡、鷹野、杉浦、齋藤、望月、遠藤、霞澤三本槍へ、大野、鷲崎、阿部、郡司、村田焼へ

晴　鷲崎、遠藤、齋藤、村田、郡司歸京、一同ノビル。

晴　堀岡、鷹野、杉浦岳川より奥穂へ、宮川牧場へ、十合、中島常念より來る、堀岡一行七時歸幕

晴　鷹野南へ、他ノビル。

曇時々晴　宮川、十合平湯へ、中島鯱一匹釣り大騒ぎなり。

雨　土方、武田（部員外）入幕

雨後晴　望月德澤へ行き歸らず

晴　望月涸澤へ、中島、阿部、大野、德本から歸京。堀岡、杉浦、峠まで送る。土方、武田焼へ。

平野、室谷（部員外）入幕

晴　土方、武田歸る。堀岡、杉浦、奥又白へ、

後五時、堀岡、杉浦、奥又白より、望月、井上氏等を伴ひ涸澤より歸幕

晴　井上氏等歸京

小雨　後三時最後まで頑張つた堀岡、杉浦、望月も歸へり、天幕は又來る日まで清水屋に預けられる。

昭和九年

穂高

堀岡清、鷹野雄一、上條孫人（案内）

五、二　曇　松本——（自動車）——澤入（一〇、三〇）——上高地（五、二〇）

松本迄、孫人が來てゐた。上高地では大井庄吉方へ泊る。

五、三　晴　上高地——徳澤

五、四　快晴　牧場（四、三〇）——本谷出合（七、〇〇）——シーデポ（八、三〇）——奥穂頂上（一、〇〇）——ザツテル（二、〇〇——一一、三〇）——奥穂ザツテル

（二、二〇——三、〇〇）——本谷出合（四、〇〇）——牧場（五、三〇）

堀岡と二人で行く。未だ梓川は雪の下だ。四時四十分、前穂の頂にモルゲンロートが美しい。シーデポからザツテル迄は雪ゆるんで膝を没しラツセルに苦しんだが、頂上附近は氷に近くピツケルがはじける。午後涸澤はザラメとなり、スキー快適。

五、五　快晴　滞在

ツテル（八、四五——九、〇〇）——五峰（一〇、一〇——一〇、三〇）——北尾根五、六ザ

中又白に昨日あたり出たと思はれる新しいデブリが見える。午後は奥又白の口でゾムメルシーを樂しんだ。

五、六　快晴　牧場（四、〇〇）——本谷出合——シーデポ（七、四〇——八、一〇）

孫人と三人。

イションが悪い日だ。尾根にとつつく頃から雪はくさつて來て面白くないし、暑さで體が妙にだるい。コンデ

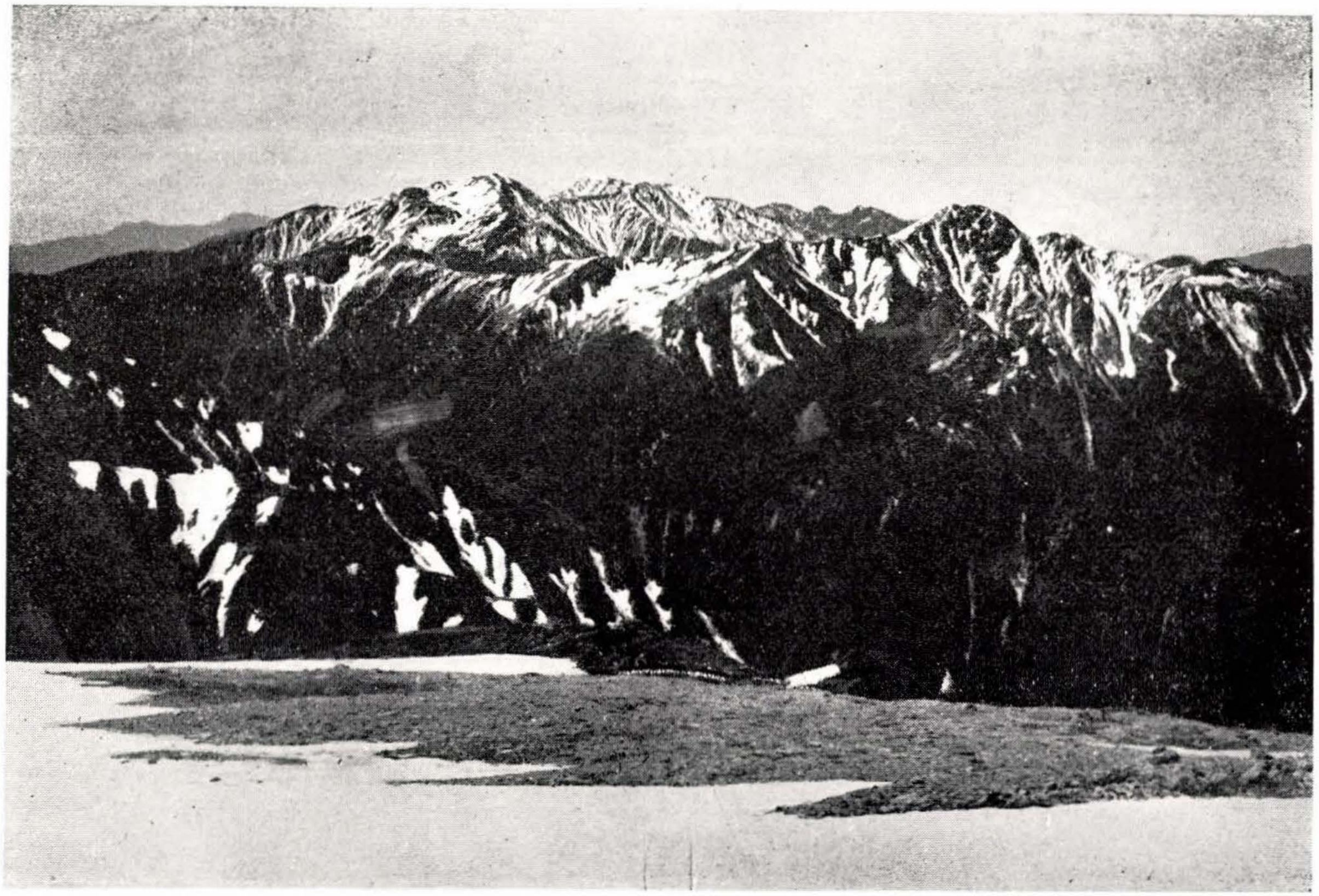
十許りの雪崩の音を聞いた。

五、七　晴　德澤――上高地――中ノ湯――牧場（五、〇〇）

五、八　晴　中ノ湯――松本――新宿

今年は雪多く、孫人の言によれば例年の三月の雪量ださうである。それ故、涸澤に於ける雪崩の狀態なども大分變則を來たして譯けで、毎年四、五月には出る筈の底雪崩も今年は無いらしく、僅に北穗高澤に一つそれらしいものを見たのみである。北尾根及び奥穗側からは小さなものが幾つか出てゐたが濕潤表層ではないかと思はれた。

又、日本山岳會で、昨冬建てたと云ふ雪崩試驗の竿は全然見當らなかつた。但し筆者は其の位置に詳なる者ではない。（鷹）



間ノ岳より南望　　小谷部全助

南アルプス

小谷部全助

甲斐駒

昭和七年

一〇、二五　晴　日野春（六、〇〇）——柳澤——笹平——黒戸山——屏風小舍（三、三〇）

新雪で薄化粧された怪奇な岩峰に胸を躍らす。

一〇、二六　晴　小舍——七丈小舍——頂上——七丈小舍

朝、水場が凍つて了つて弱つた。七丈の少し上から薄く雪が地肌をおほうて居る。素晴しい秋晴れで三六〇度の眺望絶佳。北アルプス連峰はもう眞白な冬の姿だ。北岳は流石に鋭い岩稜を白銀に輝かせて憎い程の貫錄を示して居る。去るには惜しい天氣なので、頂上で悠々と伸びて七丈泊りとする。

一〇、二七　晴　小舍——屏風小舍——尾白溪谷——駒前宮、

水の色が鮮かな綠で紅葉と映えて實に綺麗だつた。あの瀧、この淵と、暢氣に賞美し乍ら歩いた爲案外暇取り途中で日を暮らして了ふ。

一〇、二八　曇　前宮——臺ガ原——日野春

昭和八年

白峯三山・鹽見岳　　十合健二、中島孚、(人夫)青木正一

七、一三　甲府（四、四六——六、〇〇）——源村有野（六、三〇）——駒場（七、〇〇——七、三〇）——大曾利（九、三〇）

荒川小舍まで行く積りだつたが、丁度芦安村の議員選擧の爲人夫を雇へず仕方なく大曾利の人夫の家に泊る。

一四　大曾利（六、四五）——夜叉神峠（九、五五——一〇、一〇）——鮎差（一一、五〇）——荒川小舍（一、二五）

一五　荒川小舍（六、〇〇）——ベゼイ（六、三〇）——北澤（八、二〇——一〇、四五）——峠下の水源（一〇、二三〇）——北岳小舍（一、二〇）

一六　朝から雨　小舍滯在

一七　晴夕立　北岳小舍（六、〇〇）——北岳往復（六、三〇——八、〇五）——前白峰（八、四五）——間岳（九、三五）——農鳥小舍（一〇、二五——夕立——二、二〇）

一八　晴夕立　農鳥小舍（三、一〇）——農鳥岳（二、四五——二、五〇）——農鳥小舍（六、三〇——六、四〇）——三國岳澤出合（七、一〇）——熊平澤出合（八、〇五）——農鳥澤出合（九、一〇）——廣河原（一〇、四〇）——池ノ澤、雪ナゲ

澤出合（一一、二五——一二、〇〇）——雪ナゲ澤水源（一二、一二五）——

七、一九　晴後曇　キャンプ（六、〇〇）——北荒川、鹽見鞍部、北荒川往復（七、〇五——八、一五）——

北俣岳（八、四五）——鹽見岳（九、一五——九、四五）——本谷山（一一、五〇——一二、〇五）

——三伏小舎（一二、四〇——一、三五）——三伏峠（一、五〇）——大河原、鹿鹽分岐點（二、

二〇　晴　鹿鹽（一〇、〇〇）——小澁分岐點（一〇、四〇）——瀧澤（一、四〇）——南澤（二、三〇——二、四〇）——

一〇——四、二二）——自動車、伊那電鐵、省線——松本、飯田屋（九、〇〇）（中）

駒・仙丈・白峯・鳳凰

小谷部全助

七、一三　曇後雨　日野春（六〇〇）——柳澤（七、三〇）——駒頂上（八、〇〇）——屏風小舎（二、三〇）——北澤小舎

七、一四　薄晴、後驟雨　小舎（五、〇〇）——駒頂上（八、〇〇）——仙水峠（一〇、三〇）——北澤峠——仙丈小舎（四、三〇）

（一一、三〇）

北澤小舎の水石春吉に山の話を聞き乍ら晝食をとつて居る間に一天掻き曇つてひどい雨になる。晴れさうもない

ので小止みに乘じて出發すると、北澤峠を過ぎるか過ぎぬ内に又豪雨だ。賴りないマントの浸水にすつかりぬれて

漸くヤブ澤源頭の仙丈小舎へ登り着く。天候益々險惡で非常に寒く感ずる。

七、一五、一六、滞在。小止みの時、すぐ上の雪田へ滑りに行つたり、馬の脊の方を散歩したりする。小舎番の通稱岩鷹爺さんは一風變つた男でおミキを飲んでは伊那踊りや手品等々の隠し藝を並べて退屈を紛らせて呉れる。又、駒の屏風で此處は兎料理で有名だと聞いたが本當にさうだ。毎朝爺さんはあちこちにかけた罠を見廻りに行つては必ず一匹二匹とぶら下げて來て早速料理して食膳に出して呉れるが、高山の爲か臭味は少しもなく、鶏肉にも劣らぬ位に思はれた。

七、一七　半晴時雨模様　仙丈小舎（五、三〇）——頂上（六、〇〇）——野呂川越（一〇、一〇）——三國岳（二、〇〇）——間ノ岳（三、三〇）——北岳小舎（六、〇〇）

天候恢復に雀躍、張切つて出發する。仙丈の頂で丸虹の中に御來光を見る。稀にしか見ぬこの現象の神祕に打たれて暫し立ちつくした。三國岳から少し登ると遭難者の追悼碑を見て、間もなく間ノ岳だ。流石に殘雪等も一際多い。北岳小舎は山稜から相當降つた所にあり登りの苦勞を考へて一寸憂鬱になる。

七、一八　晴雲多し　小舎（六、三〇）——北岳（八、〇〇——一〇、〇〇）——大樺澤下降——廣河原小舎（三、三〇）

大樺池への道を誤り、止むなく叢林を漕いで大樺澤へ降り廣河原小舎へ着く。惡場等殆んどないおとなしい澤だ。

七、一九　晴霧深し　小舎——白鳳峠——地藏岳——鳳凰小舎（北御室の少し上流にあり）

七、二〇　晴　小舎——賽ノ河原——觀音岳往復——北御室——青木湯——韮崎

素的な眺望。觀音の頂で二時間程も伸びて殘つた食料を片付け乍ら目を樂しませた。ドンドコ澤の景觀も惡くない。五色の瀧等思つたより大きく立派なものであつた。

鹽見岳

鷹野雄一、他五名

七、二四　晴時々驟雨　上高地——辰野——伊那大島（三、〇〇）——落合（九、五〇）

辰野で同行者五名と落合ふ。大島から落合迄の道は蒸し暑くて妙にへばつた。

七、二五　雨　落合（八、〇〇）——鹽湯（九、三〇）

雨の爲め鹽湯でのびてしまふ。

七、二六　雨　鹽湯（六、二〇）——製板事務所（七、五〇——九、〇〇）——

澤（一一、三〇）——三伏峠（二、〇〇）——三伏小舍（二、三〇）

雨を冒して出掛けたが、南澤邊より暴れ氣味となる。雨具は無し、寒さは募るしで全く閉口した。

七、二七　風雨　滯在

七、二八　曇　小舍（五、五〇）——本谷山（六、三〇——一〇、〇〇）——本谷山（一二、五〇——一、四〇）——天狗岩（八、一五）——小舍（二、一〇）——鹽見岳（八、五〇——

ガス甚しく展望は皆無。頂上では晝寢をした。

七、二九　晴　小舎（五、〇〇）——鹽湯（八、二〇）　大草（二、二〇）——（自動車）——飯島——
辰野

天候回復に向ふも風邪を引いて小生一人下山す。當てにしてゐた大草からのバスが、道路工事とやらで不通となり、坂戸橋迄歩かされたのは辛らかつた。

赤石、荒川東岳

小谷部全助、齋藤正治、遠藤竹雄

一〇、二一　晴　身延——早川大橋——大島（一〇、三〇）——雨畑（一二、〇〇——一、四〇）——西澤小舎（九、三〇）

前日迄の豪雨で波高島の渡船不能。仕方なく大廻りして時間をつぶす。身延から大橋迄バス、大橋から大島迄トロリー。西澤小舎迄の途は所々崩れて夜道は少し危険である。

一〇、二二　晴　小舎（八、四〇）——所ノ澤越（一〇、〇〇）——所澤小舎（一〇、〇〇）——（一二、〇〇）——倉澤間ノ尾根（五、〇〇）——所澤、倉澤間ノ尾根上で野營（六、〇〇）

通過不能のガレ（二、一〇）——同尾根上で雪は全然見えぬ。前日の雨で消えたのだらう。椹島への道所澤越からは眞正面に赤石の巨體が仰がれる。果して

は、初めは何の障害もなく暢氣に降つたが間もなく崩壊が現れ初め遂にどうしても通過出來ぬガレに逢着し傍の小澤から山腹を攀ぢ苦戰の後、尾根上に達し、倒木に惱み乍ら降つたが夕やみに追付かれ、水も無い尾根上で野營す

る。

一〇、二三　曇後風雨　野營（七、〇〇）——道路逢着（七、四〇）——赤石小舍（一一、〇〇）

一〇、二四　晴　椹島（六、三〇）——赤石小舍（一一、一〇）——大聖寺平（四、五〇）——荒川小舍（五、一五）

昨日の苦闘に較べると今日は樂園の散歩だ。登山道はよく踏まれて居るし、天氣は素的な秋晴だ。惡澤、聖、兎等々を左右に眺め、後ろには富士が獨り中空に浮いて居るのを見る。富士見平下にて遠藤體調子惡く引返す。大井川を下つて靜岡に出ると。三時頃より霧が卷き始め、期待した赤石頂上の眺望も無駄となつて了ふ。西側一帶の這松を粧ふ霧氷が美しい。

一〇、二五　晴　小舍（八、〇〇）——中岳（一〇、四〇）——惡澤岳（〇、二〇）——二軒小舍（五、〇〇）

惡澤岳迄の道は非常に良い。天氣晴朗で南全峰、指呼の內だ。千枚岳下から二軒小舍へ通ずる道は最近開かれたらしく、切株等も生々しい。案外立派な道で二軒小舍迄何の不安もなく導かれた。

一〇、二六　晴後曇　二軒小舍（一、二〇）——轉付峠（二、一〇）——廣河原（四、〇〇）——新倉（五、〇〇）——角瀨（八、〇〇）

餘り伸び過ぎて新倉からのトロ終發に遅れ、高い料金で特別に出させたが案外時間が掛り泊る事にした。

一〇、二七　晴　角瀬（八、〇〇）――早川大橋――波高島――甲府。（小）

昭和九年

甘利山スキー行

小谷部全助

二、三　雪後晴　韮崎驛（六、三〇）――研場（八、〇〇）――甘利山――韮崎

研場の鑛泉宿からシールをつけて登る。椹池迄の長い登りにはウンザリする。甘利山上は高原状をなして仲々良いゲレンデだ。雪は大體粉雪で平均一米位。

二、四　晴　小舍――研場――韮崎

富士、秩夫、八ケ岳等がよく見える。南アルプスは、惡澤岳の上半と地藏岳の頂上邊を望み得るに過ぎない。三月上旬雪が幾分落付いた頃がよくはないかと思ふ。

甲斐駒

小谷部全助

四、二二　薄晴　牧原（七、〇〇）――柳澤（七、四〇）――駒前宮（八、五〇）――双渡り（二、〇〇）――刀利天宮（三、〇〇）――屏風小舍（五、〇〇）――笹平（一一、〇〇）――

昨日の雨は雪だつたと見えて、見渡す鳳凰、アサヨ、駒の連峰は全く冬の姿である。刀利天狗からは樹下一面四、五尺の積雪で、まだよく緊らずもぐつて苦闘する。夏途がわからぬので途中から尾根上に出て漸く屏風岩下へたどり着く。この鞍部は雪少く、小舎内の吹込も大した事はなかつた。

四、二三　曇　小舎（六、〇〇）——七丈小舎（七、三〇）——頂上（一〇、〇〇——一一、三〇）——刀利天宮（三、二〇）——笹平（五、〇〇）——日野春驛（一〇、〇〇）——二〇）

懸念した屏風岩の梯子も、殆ど雪を落して居て安全に通過出來た。七丈小舎は屋根だけ出して埋まつて居る。附近の岳樺下の丈高い這松叢も一面、雪に隱されて樂に途をとる事が出來た。鳥居のある所からは全然尾根に從つて攀ぢる。底隱れのした地獄谷に臨む急傾斜を登る時は自重して一歩一歩ステップを深く切つて登る。何しろこんな所で獨りスリップしたら全く絶望だ。頂上からは曇つては居たが、仙丈、白峰の眺望がよかつた。今年は特別雪が多く、皆眞白で、野呂川もまだ上流は雪の下に眠つて居るのか、一面に白い。降りは雪が緩んで、アイゼンにゴロ〳〵附着し、その上、登りの時のステップがずれるので、極度に緊張して愼重にピツケルで確保しながら危險區域を降つた。バスに間に合はず日野春迄テクつて足が棒になる。

白峯三山

林　俊介、小谷部全助、森脇芳之、小林重吉

六、一三　霧深シ　甲府（四、三〇）——駒場（六、〇〇）——大曾利（八、三〇——一〇、〇〇）——神峠（一、四五——二、一五）——鮎差（三、一五）——蝦平小舎（四、一五）——池山御池（九、五〇——一一、〇〇）——北岳三角點下（五、二〇）

一四　晴　小舎（五、一五）——北岳小舎（六、〇〇）

池山釣尾根は登り口と北岳附近を除く他は容易な道である。間岳東側は夥しい殘雪でまだ眞白だ。北岳小舎は雪の吹込が多く排除に一苦勞する。

一五　晴　小舎（七、〇〇）——尾根上（七、四〇——八、〇〇）——間ノ岳（一〇、〇〇——一〇、三〇）——農鳥小舎（一一、三〇——一一、〇〇）——西農鳥（一、四〇）——農鳥岳（二、三〇——三、〇〇）——四、二〇）——大門澤降り口（四、〇〇——四、二〇）——大門澤小舎（五、四五）

眺望絶佳、赤石、鹽見等を始めとして木曾駒、北の連峰に迄も及ぶ大パノラマに一同歡喜する。大門澤のグリセードも實に快的だつた。

一六　雨　小舎（八、〇〇）——奈良田（一〇、四五）——西山溫泉（一一、四〇）

一七　晴霧多し　溫泉——飴ノ茶屋——出頂茶屋——鰍澤——甲府　（小）

中央アルプス

昭和八年

森脇芳之、小林重吉

木曾駒岳

一〇、一九　小雨　辰野（五、三〇）―宮田村（七、〇〇）―四合五勺製板所（一、一〇）

二〇　暴風雨　製板所泊

二一　曇　製板所（八、〇〇）―伊勢瀧―馬背―駒ケ岳（二、一〇）―木曾小舎（二、三〇）

二二　快晴　本曾小舎（六、〇〇）―本岳―中岳―劍ケ峰（七、二〇）―中岳―木曾小舎（八、三〇）―寢覺床（二、二〇）―上松（六、〇三）―歸京

スキー合宿

昭和七年

冬期スキー合宿

（野澤溫泉、酒屋）

期間　十二月廿三日――卅日

参加者　部員――增山清太郎、高見要、十合健二、堀岡清、小橋謙三、中島孚、

都員外――齋藤正治、森淳、他數名

（五色溫泉、宗川族館）

昭和八年

冬期スキー合宿

期間　十二月十八日――一月三日

参加者　部員――十合健二、宮川雄二郎、小橋謙三、中島孚、堀岡清、林　俊介、望月達夫、

湯田坂哲、豊田忠巍、大野惠司、鷹野雄一、小谷部全助、小

林重吉、森脇芳之、遠藤竹雄、西野博、齋藤、山崎、

部員外――手塚、長谷川、坂垣、清水、小柳、上野、林、江夏、佐藤、鈴木、大掛、

松木謙三、近藤恒雄、增山清太郎の四氏來る。一同「殿下の小舍」までお供する。夜は先輩現役合同の大懇親會、

二十四日、連休を利用して東京から先輩、中川孫一、柏原、矢口、伊藤、東京土産に一同大滿足。

昭和九年

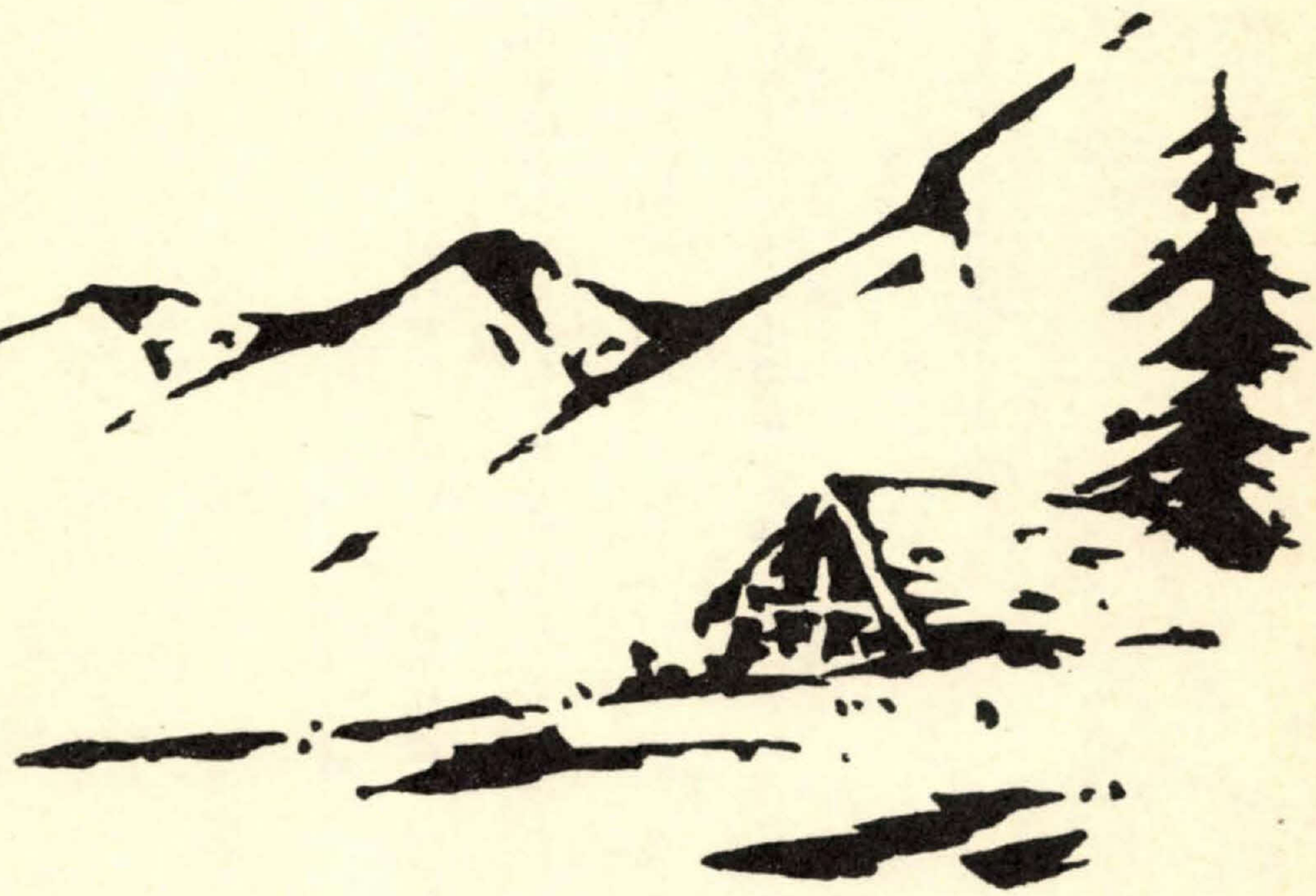
春期スキー合宿

期間　三月八日――廿一日

参加者　部員――十合健二、堀岡　清、小橋謙三、宮川雄二郎、中島　孚、鷹野雄一、小林重吉、湯田坂哲、

部員外――北野、坂垣、新谷、他數名

（野澤溫泉、酒屋）



小山舍

こゝには、登山の漫言を最も短い筆で書かれたものを載せたい。山男にも辛味もあらうし甘味もあらう。硬苦しい事ばかり云つてるのが人間の能ではない。さゝやかな山小舎の爐傍からもれて來る山の讃美の聲はどんなに喜ばしい事だらう。

山岳部員だといふ事は、山が好きだといふ事の證據だ。だから山へ行くのはあたりまへで、不思議はない。山へ行かない奴の方が變だ。だが山へ行くさいふ事の中には御嶽や高雄山邊りをぶら〳〵する事をも含めるべきだ。要するに山へ行くといふ事は山への愛着を感じてゐるさいふ事なのだ。

×　×

「立派な部室が出來たら、部室にばかり屯して居て山へ行く人が少くなるだらう」と或る先輩が心配したとの事だ。然し部室でごろ〳〵してゐるさ自然に山へ行き度くなるから不思議だ。その理由は部室でごろ〳〵しやうといふ樣な奴は山への愛着を感じてゐるからだらう。でなくてもさすると部室は人を山へ行かせる不思議な力を持つさいふ事になる。兎に角部員が部室に屯してゐるといふ事は決して惡い事ではない。從つて部室はどんなに立派にされてもよいさいふ事になる。

×　×

部も人間の集團の一つだから、それの維持發達には、色々と爲さねばならぬ仕事もあらうし又守られねばならぬ規則も出來るだらう。昔から山岳部では、何とか彼とか議論が行はれたにしても行はれないにしても、皆んなが自然に此の仕事に義務を感じ且規則を守つて來た樣だ。氣持がぴつたり一致して居た爲だらう。此が山岳部の一番いゝ所だつた筈だ。最近はどうだらうか。山での協同的生活が延長されゝばそれでいゝ筈だ。お互に部を自分のものと考へれば出來る筈だ。（ＡＲＡ）

山想漫言

山歩きをする人は、

氷切りや、岩登りに巧みであるばかりでなく、高根に咲く花、森に鳴く鳥の名位知つてゐたい。

山の名に明るいばかりでなく、吾々の頭上にかつは消え、かつは浮ぶ雲の種類、夜空にきらめく星座の名位覺えてゐたい。

寫眞器を携へると共に、スケッチブックの一册も、リュックサックの一隅に入れて置きたい。

雪崩の音に胸を轟かすだけでなく、美しい樂の音にも耳を傾けたい。

だが、山男は必ず斯くあるべしと云ふのぢやない。そりや何派とか、――何んだか難かしい名を稱する連中は、岩を、氷を攀ぢて山と戰爭してゐさへすればいゝと云ふだらう。でも彼等は彼等さ。僕は斯くありたいと思つてゐるのだ。

×　×

山へ登る氣持、それは山歩きでもしやうさいふ人は、誰れでも一應は考へて見るものらしい。亡くなつた大島さんは、其の著「山」の中で、自分の山に對する氣持は決して趣味やスポーツなどではないと云つて居られる。僕さても、其の眞摯な氣持が判らないわけではない。そりや、僕だつて登山が野球やボー

トと同じ範疇に入ろとは思つてゐないさ。だが、結局に於て山歩きもスポーツの一種ぢやないだらうか。少なくとも、僕の山登りに關する限り明らかにスポーツである様な氣がする。山に入つてやれ眞理を求めるの、哲學的思索をだうかうするのと喋べる奴はキザだ。山が生命だなんて云ふ奴は感傷さに悶が浮く。

僕の友に斯んな男が居た。

彼は極端に山を愛し、山が彼の全部であり、生命であるささへ云つた。ところが不思議な事に彼は一人の少女と相愛の仲であつたんだ。乍併、或る時彼女に緣談が起つた。そして、それを聞いた彼は、山が彼の全部であり、生命である事も忘れて淋しがり到頭斯んな結論を得た。

「山男にだつて感傷はあるだらう。そりや、岩をへつたり雪渓をとばしたりする時は別さ。だが、長い間、山に生活してゐる中には、時として、人戀ふる想ひが起きないものでもない。故辻村氏も云つてゐる。

『家族と共に居れば、獨り離れて山を思ひ、山に入れば却つて麓に殘した家族を想ふのではあるまいか』と。

幾人かの有名な山岳家連が山が自己の全部であると言つてゐるのは、絶對の意味ぢや無いのぢやなからうか。いくら山男だつて、矢張り對人關係に無頓着ではあり得ないだらう。山男にしたところが、所詮アリストテレスの云つた人間だもの…」

戀愛に無頓着な親愛なる山友諸兄は「彼」の様な奴は山男の風上に置けぬ男と憤慨されるかも知れぬ。だが、結局に於て山ぢやない。ごいばかりが山男ぢやない。山男だとて戀に喜び泣く事もあらうぢやないか。

亡くなつた板倉さんの様にアルペンの羊飼でもしたいと云ふなら別の話。學校を出たら山に行かれぬとて嘆く輩よ、それでも御身の全部は山にあるのか。僕は「彼」に同感であり、寧ろあたり前だと思つてゐる。(エチ坊)

山で馬鹿にされた話

山の動物には熊を始め野猪、豺(やまいぬ)、羚羊等種々あるが、我々に出會す動物は小さい動物が主で、私はこの小動物に相當馬鹿にされた。

小さい奴の内で最も蟲の好かぬのは蛇である。曾て私は單獨谷川岳オジカ澤を登つた。山道が無くなつて最初の瀧をやつと登つた所で一休みと腰を下ろさうとしたトタン一匹の蝮を足元に發見した。ハツと驚いて三米ばかり後飛び。何と圖太い奴だらう一寸も動かない。三角の頭をくの字に曲げて私を睨めつけてゐる。澤が細いので樂に通れるのはその蝮のゐる所だけだ。何か投げれば如何にも飛び付きさうなので投げる氣力がない。進退谷まつてしばし蝮を眺めてゐたが頑として動く様子がない。仕方なく迂廻するべく對岸の雪解けのドロ〳〵ベタ〳〵を這上つた。手懸を見つけてさて蝮や如何にと見れば何處かへ逃げ失

せてゐる。「サエッ」舌打ちしても始まらない。遂にたつた一分で通れる所を廿分もかゝつてしまつた。

× ×

やはり一人で岩菅山へ行つた時だ。發哺温泉から先は御承知の様に高さ二米位の笹籔だ。この中に茶色の毛列の整つた大きな猫程の貂がゐた。蝮と異つて可愛い〳〵。私がじつと見てゐると彼も亦じつと見てゐる。逃げようともしないが石を投げる眞似をすると二尺程逃げて又私の方を見つめてゐる。私はその時貂一匹の相場拾圓位なりと職業意識を出して矢庭に大きな石を拾つて笹籔の中に突進したものだ。しばらくして私は手を血だらけにして空しく出て來た。貂と格闘したのではない、笹の葉で切つたのだつた。

× ×

山小舍に飼はれてゐる犬には非常に人懐い犬がゐる。志賀高原の熊の湯にも、スキーを持つてゐる人なら誰にでも尾を振つてついて行く可愛い〳〵犬がゐる。今年の春この温泉から私は友人のH君と共に鉢ノ山へ出掛けた時この犬がついて來た。鉢ノ山から横手山の方へ向つて行つてもついて來る。追ひ返す氣もなく横手山の頂上で晝飯を食ふことにした。さてたつた二つの握飯の中の一つをH君は開いたまゝリユックの上にのせて立小便をした。その時早くも犬はその握飯をパクリとやつてしまつた。あゝ、その時のH君の顏、大食家だけに悲愴だつた。

× ×

岩魚も相當人を食つた奴である。尤も釣には素人の私であるから馬鹿にされるのも無理はない。上高地の岩魚ときたら更にすれてゐる。

× ×

私は一日上高地で釣竿をかついで岩魚釣に出掛けた。水の澱んだ靜かな所には大低五、六匹集つてゐるのが見える。そつと絲を下げると岩魚が食ひに來る、パクリとやつたな、と思つて竿を上げると釣れてゐない。何回やつても同じことだ、魚はたゞキツスするだけに過ぎない。釣は根氣なりさばかりしばらく同じことをやつてゐる中に突然そこに鯉程もあらう大きな奴がパクリとやつて來た。實に悠然たるものである。こいつを釣つてやらうとすぐ餌を側に持つていつた。パクリとやると思ひきや見向きもしない。口の側に出してもキツスもしない。何回持つていつても決して食はない。えゝまゝよさばかり側にあつた大きな石を叩殺さんばかりに投げ付けた。而して又別な所、又別な所とやつて、やつと五寸ばかりの岩魚を一匹釣つた。たつた一匹の岩魚を釣るのに數十匹の岩魚に馬鹿にされたことになる。

× ×

まだこの他にも二、三回馬鹿にされたことがあるが併し私は彼等が好きだ。山の動物や植物は私にとつては永久の戀人である。（H・S・K）

眩惑

霧が出て來たので再び登つてきた急な尾根を逼ひ下り、ゴロ〳〵する輕石にやゝもすれば足場を奪はれ勝ちになりながら下山し始めた頃はもう邊りは一間先も見えなくなつて終つて居た。

『ひどい事になつたな！』『兎に角早く降らう』

それから尾根を一氣に下つたつもりで濕つた空氣の中を歩いてゐると、何だか道に迷つた樣な氣がした。それでもどん〳〵歩いてゐる中に遂にきり立つた岩の上に出て終つた。間違つて火口の方へ下りて終つたのである。仕方なしにそのまゝ再び冷い霧に皮膚を洗ひながら唇を紫色にして頂上附近に出た。岩がぬれて黒く光つてその大きな岩と岩との間から吹き込んで來る霧がそれらにぶつかつて白く碎けて行く。ぐづ〳〵してゐられないので又直ちに疲れた足を引摺つて麓目ざして下り始めた。もう少し下まで行くと霧が晴れるだらう、さうしたらなんとか見當がつくさ」「でも變だな、幾度も來てゐる道を迷ふなんて」こんな事を云ひながら、ひたすら火山灰の上を辷つて下つた。其の頃からだん〳〵夕が邊りに迫り霧がます〳〵濃くなつた。腹はへる、足は浮く、……突然「人だ〳〵」……。二人共期せずして同時に叫んだ。下の方から霧の中を暗灰色の人影が登つてくる。だん〳〵近づいて來る。こつちから先づ聲をかけた。「——もし〳〵、一寸お訪ねします」……二人共自然に立ちどまる、その人も立ちどまる……無氣味な沈默が續く、人影は時々體を動かしてゐる。異樣な緊張が體内を走る。はては冷いものが首筋から背中に流れる。二人ともがなんであるかどんな人かをはつきり見ようとする餘裕が有つた。霧がひどいのでしまつて有つた眼鏡をそつと後ポケットから取り出して恐る〳〵一種恐しい樣な氣持でかけ、無理に其の方に顏を向けた。次の瞬間餘りの馬鹿らしさに緊張も何も一時にとけて思はずふき出して終つた。上に居たO君はびつくりして此方を見た。無言で眼鏡をO君に渡した。彼も間もなく、つまらない樣な笑を浮べて此方を見た。しばしの間聲も出ない。

「何あんだ燒殘りの木か」

それから二人共此の木の影に刺戟されたかの如く、迷ひつゝもどうにか人家の燈火のきらめく所まで出られた。停車場へついたのは八時過の事だつた。木の椅子の上で人心地に歸つた。暗い此の未開の驛のランプに輝らされながら今日の事をゆつくり空腹を滿しながら語り合つた。

「腹でもへつて道に迷ひ込んだ時に起る眩惑だね」

「さうだよ、實際よくある事なんだらう。アチラの本などに、疲れ切つた登山者が火のともつた明るいヒユツテを見出してそこまで漸くたどりついてそのまゝ小舍と思つて入つて凍死した

なんて云ふのがあるではないか、あれと似たもんだね」
「面白いね二人の目に同時に寫つてしかも常にほんさうの人の様にゆれてゐたからね。どう見てもあれは人だよ」
「眼鏡をかける時は恐しかつたぞ」
「山の精女でゞもあつたら良かつたがなあ」
「馬鹿云つてらい、今になつてはさうだがあの時は……」
「話の種になるね、ハハ……」
遠くから近づいてきた物すごい音が僕らの會話を亂した。ギイ……ギシ〳〵〳〵、列車が靜かな夜のプラットホームにすべり込んで居た。（哲）

頭へ來た話

山へ行く。頭細胞が時々「大自然に調和せん」とでも思ふのか、原始の姿に歸へる。
俗に「さう〳〵頭へ來たな」と云ふ、本人は大眞面目、愛嬌はあるが同情はされない。
原因は解らない。高度の所爲では無い、低山でもなる。勿論食物の所爲では無い。宿屋住ひで人間樣並な榮養を攝つてゐる時でもなるから。
症狀は千變萬化、經驗に富む諸兄は思ひ當る點があらう。
スキー合宿の時だつた。嬉しい夕食も終つて炬燵を圍んだ樂しい一刻、晝間の事も語り盡された頃、誰が云ひ出したのか話は簿記に及んだ。
「君貸方は左だね」
「ウンCは左だよ」
「Cとは借方ぢやないか」
「馬鹿、貸方だよ」
「貸方は右だよ」
「でもCは左だよ、去年苦しんだのを忘れたか」すると自信のあるのが「いやDは絶對に左だ」これが續く事一時間有餘、天下の商大の三科の偉い人々が廿幾人掛つて結局解らん。これが將來商賣して飯を食ふのかと思ふと涙が出る。
これは全部が頭へ來た話。混亂症とでも名付けて置く。混亂症でもこれは基礎不定の方である。五色ケ原から藥師岳を通つて上高地へ行つた事がある。行つた人は知つてゐるだらうけど上岳から黒部五郎岳へかけて對岸の雲ノ平が氣持良く見える。いゝ所だなと思ひながら同行のT君に「雲ノ平はいゝ所だね」と云ふ、「雲ノ平はいゝ所だね」と云ふ、が口から出た聲は「太郎平衞平はいゝ所だね」と云ふ、指差ながら云ふのだから友は妙な顏をする。一回ならいゝが二回も三回もやるこれも一種の混亂症。
農鳥岳と西山溫泉の間の大門澤の小舍、訪れる機會があつたら小舍帳の後の方を讀まれたい。其處には短時間の大門澤の下りに「頭へ來た」一人の代表的ピントの狂つた迷文がある。後に說明が加へてあるからすぐ解ると思ふ。これ等妄語症の中だ

らら。此の他水が上へ流れると騒いだり、街燈を電車に見て重い足で五町全速力で終電車と見て馳けたりする錯覚症を始め色々あらう。

尻へ來た話

宗川旅館から賽河原へ行く途中新五色への道と別れてから一町少し、普通の人は氣づくまいが徑一寸位の樺の根株が一列に行儀良く並んで雪の上に露出してゐるのがある。此の眞上を吾が親愛なるM君が勢良く「ダダ……」と尻制動で通過した事がめつた。唯一の目撃者として私は同君には氣の毒だつたけれど實に感慨無量だつた。數日の間尻の横を青黑く腫らして居たM君を皆さんは覺えて居るだらう。

所が「明日は吾が身に掛る人の運」。年も明けて試驗も濟んで富士山へ遊びに行つた時の事。四合目上から小御嶽ゲレンデへ行く道がある。初めて幾分廣かつた道は段々狹く急になる。長いスキーを持て餘しながらそれでも何とか十町餘りも行つた。道は其處からガレの様な所へ落ちてゐるらしい。諦めて廻れ右をし、スキーで登つた所位スキーで降れる、と其儘降つた。其の降りの悲慘な事よ。制動も糞も有つたものでは無い、滑るので無いてさへ安定の怪しい體、忽ち後へ、尻制動の姿勢宜敷く丁寧に岩の上の雪を拭いて降る事六七間次は二間ばかし空中飛行して瞬間雪の中へ全身埋沒……三分間靜寂……やがて唸聲、默つて居たが尾骶骨は一週間ばかしジン〳〵痛んだ。五色のM君の氣持解るです。（三宅番公）

漫語

1

晴れた日、國立の通りから雪に埋れた富士山でも見えると、山はいゝなあとつく〴〵思ふ。そんな日の午後ゼミナールで退屈な報告でも聞いてゐると白扇の富士がグル〳〵舞つてゐると云ふ様な極く他わいのない夢を見たり、飯を茶碗に山の様にもつたのを七杯も八杯も平氣で平げてにや〳〵笑つてゐる誰かの顏が浮んで目を覺してからはつとするんである。けれど山に二週間位過し、殊に今夏の様な猛烈な豪雨に會つて籠城を餘儀なくさせられると、ちと心境に變化が起る、制限された山小舍の中で時間潰しの遊びも一日位で大低あきて了ふが窮すれば通ずとやら運動不足と屋根へ叩きつける雨へ聲噴をかこつて、枕の投げ合ひが、遂には蹴枕の珍競技に迄發展されるがそれも小舍の煖と當地流行の御詠歌のコーラスとなる頃には大低の者はの

びて了ふ。

さるにても世の無常よ。てな事を考へウツラ〳〵と夢路に入ると、次から次へと、東京の友の顔や街角の情景がちらつく、舌がころりとする奴をぐつとのみこんだと思つたら目が覺めたです。あゝ東京が戀しい。彼は矢張り都會の山男でした。

2

三月の末信越と上越のスキー場をみて廻る爲に、先づ菅平に着くと新雪が降つたばかりで絶好のコンデイション、翌日猫岳に登つた時は、是は亦素晴らしい快晴。淺間や妙高は勿論、見へる限りは津々浦々迄見渡せます。翌日吹雪の中を關山迄來ると此處は快晴で燕溫泉迄ラッセルの用もなくたやすく登れます。が夜中には吹雪となつて——菅平の吹雪が半日後此處に來たのです——一尺五寸の新雪を降らせて翌日は又快晴。この新雪が絶好の乾雪で滑降すると後からパーツと雪煙が立つと云ふ、この季節には珍らしい雪なので前山の邊りで一日中遊んで翌日なつかしの、野澤に着くと夜が亦雪。翌日が例によつて快晴。毛無山の新雪を樂しんでから湯澤溫泉に來ると、此處が亦頃合ひの狀態。で東京を出てから八日間、これ以上望めない最適の狀態なのだから驚きますね。で私はつく〴〵人生はすべて運だなと思ひましたね。

一倍が二倍。二倍が四倍。四倍が八倍。八倍が十六倍。があまり慾張ると後でひどい目に逢ふとはよく云つたものでそれから後の天氣は書かない方が……。

3

上高地の天幕の中で釣れないのに鰌釣りの本だけ口の惡い連中に見付けられたのだから、いやうるさいのなんの、が青嵐市長も曰く「釣の名人必ずしも魚を釣らず」。どうもこの理窟も感心しないので愈々惡評挽回の爲N君と一緒に態々ピツケルに釣竿を結びつけて行く。

場所は平から內藏助谷に至る黑部川、其の日御前谷の少し下手の處にさてもきれいな砂地を發見し、その眞砂の美しさ殊に砂地へ黑部の水がまるで遠淺の海の樣にひたん〳〵と打ちよせるのにみんな有頂天だ。徒涉に濡れた靴と靴下をさつて先づ砂地のヴアージンをけがしてから、三人であちこちの岩の上水の上を飛び廻はり奮闘一時間の後夕餉に大小數匹の鰌が供つた。あの日程美しいキャンプファイヤーを焚いたことは今迄になかつた。（コリー）

山登りと食慾

山に登ると、ペラ棒に腹が空る事は皆一樣に經驗する所、謂んや吾々學生連中が通常以上にエネルギーを消費する登山に於てそれは當然の事である。然し何事も需要と供給とが圓滑に行はれたければ破綻が生ずるが如く、如何に旺盛な食慾と云ふ需要が存しても物資不便の山中に於ては途端に供給が行き詰つて

しまふのである。

之を意識するせいか面白い事には山へ一緒に行く連中は自分が特に大食いでない事を何とかして皆に示さうと苦心するのである、彼等が猛烈に食つちやつた後でも必ず何か辯解の言葉をしやべる。例へば「今日は實に飯がよく食へる」とか、一番最後迄食つてゐた者は「一杯々々ゆつくり食ふのでいつも遅くなるとか」、etc。

之に對して又他の者は一々反駁するのだが彼等自身も他人が何杯食つたかなんて勘定する程餘裕のある食い振りは決してしてないのだから結局水掛け論だ。こんな事は下界で考へると全く馬鹿らしいけれども山では本氣なんだから山の感化も偉大なりと謂へる。こんな童心に歸へれるのが良いのぢやないかしら

こんな風にして飯がすむと滿腹した連中は如何にも上品に食事を終つたかの如く悠然として煙草などをふかすのである、實際晴れた日に山の頂上で四方の眺望を擅にしながらこんな風にして吸ふ煙草の甘さなんて下界の人間には分つてたまるもんかと云ふ幸福感にしみ〴〵浸れるのである。岩にもたれてパイプでもくゆらせばあつばれ繪に成る様な風景が展開する。

然しこの喫煙慾と云ふ奴が又食慾に次ぐ重要な慾望に成る、山に於ける煙草はそこにもある、此處にもあると云ふ代物とは異り、始めから何本と云ふ掛け換へのない物であるから其わが殘り少くなつたと云ふ心細さはおいそれとは云ひ表はせない。

終ひには一本の煙草も二人で分けて喫み、と云ふ様な悲壮な事に成る。

かくしてお手製の飯盒メシか、又は山小舍の飯をもり〳〵と一週間位食つてゐると何さはなしに、それらの物に不滿が起つて來るのである。と云つて決して食ふ分量は減らないのだけれど皆はしみじみ東京には美味い食ひ物があるなあと想ひ起し始める。毎日わらび、ふき、ぜんまい、わかめなんて云ふ實の味噌汁、コンビーフ、福神漬の罐詰の連續。こうなると皆は必然的に現在到底口に入りそうにもない食物の噂話を始める。

厚さ五寸もある様なトンカツが食つてみたい、いや俺は鮪壽司、天夫羅、蒲燒、又は支那料理、蛙料理、蛇料理等等、凡そ自分の知つてゐるあらゆる料理を持出して、新宿では何處が美味いさか、銀座のオリンピックはどうの、又淺草の屋臺店はどうのと皆一角の食物通みたいに成つてしまうのである。かくして幻想に於て甘い香りや味を樂しんでわづかに自らを慰めてゐる。

かゝる連中が二週間も山にゐて東京へ歸つた時の飯の食ひ振りは誠に觀物であらうと推量するが其處迄は目が屆かぬ故書く事が出來ない。勿論自分を例に取れば書く事が出來るのだけれど餘り書き榮えのしない事だから敢て謙讓の美徳を發揮する事にする、勿論例外としてこれ程がつゝきやでない、つゝましい方もゐると云ふ事を御斷りする。（吉屋司朗）

冬の甘利山で

甘利山でスキーが出來ると聞いたので、こいつは好いと試驗も眞近だと云ふのに、一式がついで出掛ける。昨日は一日雪だつたので人の足跡は一つも無く、こいつは久し振りで靜かな山を滑れると喜び乍らシールでサラサラ登つて行くと次第に眺望も開け雪もよくなつて行つて限りなく嬉しくさせる。

殊になつかしい雪白の八ケ岳が廣大な裾野の上にもり上つて居る樣はたとへやうもない。凄えー　素敵だ！　等としきりに感歎してると、——あれ、先生ずらあよ——先生え、夕飯のおかず何にするんですか——。等と黄色い聲が聞える。陶然の夢を破られて見ると四、五人の田舍の女學生が大きなお尻をこちらに向けて、モゾ〳〵し、そして其の傍にお粗末な堀立小舍が首を曲げた樣に立つてゐる。それが白樺小舍と云ふのださうだ。さにかくスキーをぬいで這入ると、居る〳〵動物園の猿みたいに、少さいのや、大きいのがウヨ〳〵と盛に奇聲を上げてゐる。

これはと許り驚いて、とり合へず先生らしい男に聞くと、明日山梨縣下のスキー大會があるので、皆泊りがけで練習して居るのだと。一寸がつかりした樣な氣で所謂選手達の練習を見にスキーを滑らせる。こゝは一六〇〇米もあるので流石に雪も多く質もよく氣持がいゝ。高原狀のゆるい坂を降ると選手連が澤山七轉八倒してゐる。殊に女學生は悲慘だ。ピンと尻を後ろに突出してスーと五、六間も行くとドタンと轉び、後に大臼みたいな穴を殘すのである。又その先生たるや更に愉快だ。古めかしいスキー帽をかぶつた三十位の男で、田舍のスポーツマンと云ふ形だ。——サア〳〵ほら〳〵あの子みたいに大膽にやつて御覽……アー〳〵そんなに立つちや駄目々々、もつと腰を曲げる。……〇〇サン、君みたいにしてちや上手くならんよ。ほらこう先生みたいにしてごらん、ほらね。彼氏やおらストツクを握りしめて滑る。まるで惡フオームの見本みたいにへつぴり腰をして、でも十間程も滑つたがトタンに重心が殘つて見事尻餅。だが、その時先生少しも騷がず、嚴肅な顏で曰く。——轉ぶ時はかう云う具合に轉ぶと絶對に怪我をせん。起きる時はかうスキーを揃へて立つ。所が傾斜に沿ふて揃えたので起きたトタンに又ボコンと一ツ。

方面を變へて、白樺交りの疎林を切開いた四粁レースコースと云ふ奴を登つて行くと、點々と村の若い衆が滑つてる。何れもへつぴり腰で間が拔けてる。そう云ふ自分も合宿等へ行くと——君のは駄目だね。腰付が全然なつてないぞ。なんてペシヤンコである。でも奴等よりはと云ふので一番上から滑り出す。凄いスピード。忽ち鮮かな制動一發。唯し顏面で。幸ひ誰も見てないので急いで雪を拂ふと又、シユーとばかり有象無象を縫ひ乍ら飛ばす。

近來にない上出來に小鼻をうごめかして小舍に戻ると、もう

夕日は落ち掛かり高原の彼方奥甘利連山や鳳凰山の頭を金色に縁どり、遥か釜無川の彼方に、八ケ岳や秋父を紅く燃上らせてゐる。とまあから云ふ様なわけで無人の静寂境を滑らうと云ふ目的は果せなかつたが、案外な堀出物をしたわいと、氣を良くして山を降つた次第である。（助サン）

スナツプ二つ

1、馬鹿の一つ覺

場所　野澤溫泉　樺小舍

人物　〇〇夫妻、他文部省スキー講習高等科山岳班講師生徒數名

時　昭和×年十二月×日

毛無へ行つた歸へりか、それでも人より先に着いて、〇〇氏夫妻は既に小舍の中だ。小舍の前の踏み固められた雪の中にベンドを突刺された二組のスキーが立つてゐる。風の吹く度毎にフラ〳〵動いてゐて見てゐる方で氣が氣でない。妙な事をする人もあると感心してゐると、〇〇夫人がチヨコ〳〵と出て來てトン〳〵と更に雪の中に突刺したものだ。ベンドを下にしてスキーを立てゐるのは分るが、堅い雪の中でもそうしろとは、どの本にも書いてない筈だ。

小舍の中からは〇〇氏の聲「ね××君ノールウェーでは…」と朗かにひゞいて來る。殊によつたらノールウエーの本にそう書いてあるのかも知れない。

講師の△△氏の曰く「〇〇さんも好い所がありますよ、こうしろと言つた事は必ずそうしてますからね。」と。

2、山男は誰方？

槍澤の雪渓で一緒になり、一俣で一緒になり、横尾い入口で一緒になり、それからは遂に一緒に歩いて來た。牧場を過る頃から日はとつぷり暮れて吉城屋に着いたのは九時に近い。ビールを御馳走になり、型通り名刺を呈上する、相手は十二、三歳の娘さんを連れた紳士、

紳士「おや商大の學生さんですか」

KとH「えゝ」

臺所が入つてゐると説明された二人のキスリングを未だ不思議そうに眺めながら

娘サン「大學生さん?!」

紳士「アハ……失禮だが、山男だと思ひましたよ、あゝ雪渓を下りてくる時などは。どうりで立派なリュックサックを持つてゐると思つた。アハ……」

お互にお前こそ山男と見られたんだと言ふ様な顔を見合せて

とKH「……」

紳士と娘サンといふのは商大那須講師の令兄とそのお嬢さんであり、KとHとは、東澤を溯行して、此の日は三俣連華から上高地へ下つて來たのだつた。（荒）

春夏秋冬

春。人の未だ入らぬ頃、小海に汽車を捨てゝ五里、たどりついた本澤の溫泉は、ひさり猫のみが留守して、案内に答ふる犀もない。えゝ、まゝよ、と、勝手に上り愈〻湯の湧く頃、宿のあるじは家族をつれ、今日一日の山の仕事より歸る。その明くる日、夏澤峠より赤岳まで、意外に多い殘雪の美しさに喜びつゝ、往きもどる吾が踏み跡が唯一すぢ、消されず、硫黄岳の尾根道に、遠々と續いてゐたのは嬉しかつた。

夏。降りやまぬ雨に待ちあぐみ、同志打ち連れだつて發つ飯田町驛の構内は何さはなく陰鬱であつた。甲斐駒の懐に入つてからも、雨にのみ明け暮れて、朝な夕なの炊爨も事かき勝ち夜おそく襲ふあらしにも、唯支柱をおさへるが關の山。つらい苦しい三日間の天幕生活も、やめて東京に歸ればやはり懐かしく思ひ出の深い旅の一つ。

秋。秩父の奥に、一人二人で分け入るは良し。雁坂の紅葉はあくまで紅く、戰場ケ原の紅葉は黄色に霞む。山に人は無く、唯炭燒の煙ひさり紫に立ち昇る。信州峠の近く、牧場も今は閉ぢて寂々。白樺の落葉を踏む足音もいつか峠の上に立つ。見渡せば瑞牆金峰の山々は、續く錦繍の上に聳え、後ろに遠く奥秩父の峰々は續く。目をひろがへせば甲斐駒の新雪、中空に白く輝く。增富の湯も秋は快い。

冬。山に行く姿となれば、夜の寒さの消え失せるは妙。スキーを擔いで行く輕い足どりも、越後の深い新雪に會へば七轉八倒の苦しみ。雪にまみれて起き上る眼に、映る白き上越の山々は何時見ても美しい。進まぬ吾が技の歎きも、備かに霧ケ峰又奥の峰の如くに、晴れ渡る。

×　×　×

春夏秋冬、山はしづかに佇む。人或は之を眺め見て嬉び、人或ひは之に接して嬉ぶ。流行る登山は山を穢すとか云ふ。併し山は、山を愛す心に、山を尊ぶ心に、永遠に崇高な清淨な姿を現はすを、惜しまぬであらう。山の穢れを歎くものはそれ自身が群集の一人だからだ、山はあくまで行詰らない。愼攀の山人には永遠の山がある。

×　×　×

春夏秋冬　山によろこびはつきぬ。山のよろこびは又友にある。年の違ひ仕事の違ひ、すべてを超越してよろこび合ふは山の友。日の暮れ果てゝ迷ふ道も亦樂しくあるくは山の友。雪の中互に抱き暖め合ふも山の友。岩に攀ぢて、互に他に己が全生命を托するも山の友なればこそ。山のよろこびは友のよろこび吾が山に友の幸を祈る、又嬉し。吾が山の友に幸よあれ！　と。（凡兒）

H……君へ送る手紙

過日T君の處へ、よこされたお便りでは、卒業論文にお忙しいとの事、その方を早く片附けて此の冬を亦山で有効に生活なさらうとする貴兄の御心掛には頭が下ります。

私共の山への讃み、それが何んなにさゝやかなものでも、山を理解し、山を熱愛する、私共の心だけは徹底しなければならないものと思ひます。結局に於ては、私共の登山が、私共の信念上に如何にしつかり組立られてゐたかと云ふ事が登山の方法如何を問はず、評價されるのですから。ウインクラーが單獨でワイスホーンを志し、不歸の客となつた事はアルプスの登山史上餘りにも有名な事實ですが、彼の單獨行を言々する聲は年月の過ぎると共に消えて行き、彼の登山が如何にしつかりした信念の上に築かれて居たかを讃ふる聲しか起らなくなつて居るのです。

私にも程なく學窓を去る日が來るでせう。そして、今貴兄が感じて居る樣な、焦慮を感じる時が到ることゝ思ひます。社會に出る事、それは私共を少なからず山登りから遠ざける樣に思はれます。けれ共、山への讃みの大部が、よし、己が雙の足で尊い歩みを頂へ向けて歩むにしても、それが總てではないはずです。山に登る者のみがマウンテニヤーではない……といみじくもヤングが言つた言葉は蓋し眞理だと思ひます。そうです。現在にあつても私共は、心の登山をしなければなりませんでした。

恒に變りなき深き、山への讃みこそ、私共をして他日未知の峰々へプルミエール・アッサンシオンのケルンを積ましめることゝ信じます。

私共に理窟は禁物。冬山をひかえて今年こそはよき收獲を、お互ひに誓ひませう。（乾瓢）

宮川君の計音

「針葉樹」第七號の校正もかなり進んだ頃、丁度八月二十九日、私共はよき部員たりし、宮川雄二郎君の計音に接した。依て、此の號に、彼の遺稿、友人達の追悼文等をまとめて載せ樣かとの計畫もないではなかつたが、故人と最も親交厚かりし、二、三の部員が休暇中の事さて在京せず、且又、急ごしらへのものより、充分その方法を考究し計畫して、第八號へ揭載した方が、むしろ故人の靈に對しても、よき捧げ物になると思ひ本號には、それ等の記事は一切載せない事にした。右御諒承を乞ふ。猶本號「山小舍」中の故人の文章は、八月七日に編者へ送られたもので、おそらくは山に關する最後の文章ではなからうかと思ふ。（編）



報　部

昭和七年度

本年度委員

代表　太田又一
庶務　十合健二
　　林俊介
會計　大友亮藏
記錄　打橋壽郎
圖書　鈴木英雄
器具　堀岡清

○**定例針葉樹會**　五月二十日　於如水會館
豫定された江口定條氏の講演は都合により中止。
○**宇佐美敏夫氏送別會**　六月廿七日　於如水會館。
同氏ホツケー選手として萬國オリンピックに遠征につきホツケー部主催にて送別會を行ふ。當部よりも太田又一、清水達雄、鈴木英雄出席す。
○「**針葉樹**」**第六號發行**　八月一日
編輯委員及び部員が、酷暑と戰ひつゝ努力した、十週年記念號生れる
○**宇佐美敏夫氏歡迎會**　九月十二日　於如水會館
針葉樹會と共同にて歡迎す。席上宇佐美氏の遠征談あり。
お土産のオレンヂは色は冴えざるも味は頗る美なり。久しぶりにて浦松佐美太郎、渡邊九郎兩氏出席す。
○**定例針葉樹會**　十月九日　於如水會館
高木英二氏の出京を歡迎す。
○**定例針葉樹會**　十一月九日　於如水會館
高瀨進三氏の出京を歡迎す。
○**豫科スキー合宿準備會**　十二月十五日
○**日本山岳會學生會員有志晩餐會**　十二月十五日　於新宿白十字
出席者　針葉樹會員—浦松佐美太郎、吉澤一郎、磯野計藏
部員—太田又一、增山清太郎、堀岡清
○**卒業部員送別會**　一月廿四日　於新宿モナミ
出席者（來賓）高瀨進三氏
（卒業部員）太田又一、勝田一郎、加藤安吉、清水達雄、鈴木英雄、高見要、田中秀三郎
丸茂平造、增山清太郎
（殘留部員）大友亮藏、十合健二、安達泰三、打橋壽郎、小橋謙三、堀岡清、豊田忠巍、林俊介、
ビールの滿を引き記念撮影をなす。
○**針葉樹會新年宴會**　二月十八日　於元園軒
蓋し此の年一月苗場外ノ川ヒユッテに於ける針葉樹會員部員集會の際某氏の發議により開催したるものなり。試驗間

際にも係らず、太田又一、鈴木英雄出席す。鈴木潰れて太田に送られて歸宅す。清水羨むこと限りなし。

○磯野計藏氏送別會　三月十八日　於如水會館

如水會館日本間にて同氏渡歐を送る。通知の遲かりしと、休暇のため學生の出席少し。砌に同氏は三月二十六日午前九時東京發渡歐の途に就きたり。

昭和八年度

本年度委員

代表　十合健二
庶務　十合健二
會計　林俊介
　　堀岡清
　　望月達夫
記錄　打橋壽郎
圖書　十合健二
器具　堀岡清

○新入部員歡迎會　五月六日　於石神井部室

出席者（本科）十合健二、堀岡清、宮川雄二郎、
（豫科）林俊介、望月達夫、小谷部全助、杉浦亮、
（新入部員）鷲崎雄四郎、湯田坂哲、
歡迎會の席上で新入部員の爲に、谷川岳行を計畫す。

○夏山計畫相談會　六月十七日　於國立部室

出席者（本科）十合健二、堀岡清、宮川雄二郎、
齋藤正治、
（豫科）林俊介、小谷部全助、望月達夫、遠藤竹雄
杉浦亮、湯田坂哲、鷲崎雄四郎
（專門部）大野惠司、鷹野雄一、

今年のプランは凡と總て上高地を中心としたものである、

○夏山準備會　七月三日　於石神井部室

出席者（本科）十合健二、堀岡清、宮川雄二郎、
（豫科）林俊介、望月達夫、小谷部全助、杉浦　亮
遠藤竹雄、鷲崎雄四郎、湯田坂哲、西野博
佐々木誠、岩井欣五、

夏山計畫に參加し、且入部する者もかなりあつて、例の如く盛會であつた。

○九月十日　豫科は石神井より小平に移轉　部室は何れの部も同じ事乍ら石神井のそれよりも汚い處で當分我慢することになつた。

○部員集會　九月十八日　於國立部室

出席者（本科）十合健二、堀岡清、
（豫科）林俊介、杉浦亮、望月達夫
（專門部）大野惠司、鷹野雄一、
夏山の思ひ出話に花が咲き、それから秋の山旅の計畫等、

午前中よりはじめ、正午過解散。

○**部員集會**　九月二十八日　於國立部室

出席者（本科）十合健二、堀岡清、宮川雄二郎、
（豫科）林俊介、望月達夫、小谷部全助、杉浦亮、
（專門部）鷹野雄一、湯田坂哲、西野博、佐々木誠、

夕霧がすつかり部室の中まで立ちこめるまで話がつきない。試驗後の休暇の計畫が種々持ち出される。

○**杉浦先生をかこんでの懇談會**　十一月廿七日　於小平十九室

出席者　杉浦德次郎先生
（本科）十合健二、堀岡清、宮川雄二郎、
（豫科）林俊介、望月達夫、小谷部全助、森脇芳之、
小林重吉、鷲崎雄四郎、湯田坂哲、西野博、
（專門部）鷹野雄一、

杉浦先生のノールウェーでのスキーの話は面白かつた。それから座談に入つて、今冬のスキー合宿の計畫等に及ぶ。

○**冬期スキー合宿準備會**　十二月十九日　於小平部室

出席者（本科）堀岡清、
（豫科）望月達夫、小谷部全助、遠藤竹雄、森脇芳之、小林重吉、湯田坂哲、西野博、

今冬のスキー合宿は五色溫泉と決定。部員外からの申込も相當あつた。

○**卒業部員送別會**　一月廿四日　於新宿セノウ

出席者（卒業部員）十合健二、大友亮藏、
（殘留部員）堀岡清、宮川雄二郎、打橋壽郎、小橋謙三、中島孚、齋藤正治、林俊介、鷲崎雄四郎、湯田坂哲、豊田忠巍、大野惠司、鷹野雄一

○**豫科部員集會**　二月九日　於小平部室

出席者（本科）堀岡清、
（豫科）林俊介、望月達夫、杉浦亮、小谷部全助、森脇芳之、小林重吉、遠藤竹雄、湯田坂哲、西野博、鷲崎雄四郎、

今年本科へ行く林の送別を兼ね、且、後任を望月とすること、及び九年度の部の方針（殊に豫科の）等がきめられた。終つて記念撮影をする。

○**臨時針葉樹會**　三月廿日　於如水會館

關守三郎氏の渡歐を送る。

昭和九年度

本年度委員

代表　堀岡清
庶務　林俊介
　　望月達夫

○臨時針葉樹會　四月七日　於小平部室

渡邊九郎氏の出京を歡迎す、ビールがぬかれ、盛會裏に十一時閉ぢる。

出席者（本科）林　俊介

○新入部員歡迎會　四月二十一日　於如水會館

（豫科）望月達夫、森脇芳之、小林重吉、小谷部全助、湯田坂哲、西野博、鷲崎雄四郎

（專門部）鷹野雄一

（新入部員）原　鐵三郎

小雨降る午後、相變らず菓子は上等ではなかつたが大いに氣焰を上げる。

○針葉樹會懇親會　四月二十二日　於國立部室

出席者（先輩）中川孫一、松木謙三、近藤夫妻、小川夫妻

磯野計藏、鈴木英雄、增山清太郎

（本科）堀岡　清、小橋謙三

（豫科）望月達夫、小林重吉、西野博、湯田坂哲

四月末のうらゝかな一日を、野外の新鮮な空氣に觸れ乍ら先輩學生打ちとけて面白くすごす。最近歸朝された磯野先輩がお土産持參で來られる。

○國立部室にて藏書調査を行ふ。　五月一日

A、洋書

B、單行本

C、「山岳」其他各山岳部々報及雜誌等

（但し、豫科部室藏書を除く）、調査員、小林俊介

○定例針葉樹會　五月四日　於如水會館

歐洲の旅を終へて歸朝された磯野計藏氏歡迎す。同氏をかこんで、オーパー・ランドやハイ・ランドの話に夢中になつた。

○定期部員集會　五月廿四日　於國立部室

出席者（本科）堀岡　清、林　俊介

（豫科）小谷部全助、森脇芳之、杉浦　亮

（專門部）鷹野雄一、大野惠司

（新入部員）小山英、木村重隆

專門部新入部員歡迎會を兼ねて行ふ。今後每木曜日に定期部員集會を開くことにした。

○定期部員集會　五月卅一日　於商品學圖書館控室

出席者　木村惠吉郎部長

（本科）宮川雄二郎、小橋謙三、堀岡　清、

安達泰三、齋藤正治、林　俊介

（豫科）小谷部全助、森脇芳之、小林重吉、佐々木

誠、湯田坂哲、原鐵三郎、森川眞三郎、岩崎利一
（專門部）豊田忠巍、大野惠司、鷹野雄一、新羅二
郎、小山英、木村重隆

木村惠吉郎部長を圍み山の座談會を行ふ。近來に無い盛會で一同腹藏無く部長と意見を交換し、不平を述べ合ふ。終つて記念撮影をした。

○夏山計畫相談會　六月廿八日　於國立部室

出席者（本科）堀岡　清、林　俊介、宮川雄二郎、小橋謙三、中島孚之、杉浦　亮、湯田坂哲、鷲崎雄四郎、森川眞三郎、佐々木誠、原鐵三郎、岩崎利一、清水慶一
（豫科）望月達夫、小谷部全助、小林重吉、森脇芳之
（專門部）鷹野雄一、新羅二郎

既に夏山のプランは大體發表されたが、今日、具體的な亦決定的なプランの相談をなす。

1、後立山縱走……小谷部全助
2、內藏助平より劍……中島　孚
3、池谷溯行……堀岡　清
4、劍澤生活……望月　達夫
5、上高地附近……湯田坂　哲
6、白峰、赤石縱走……森川眞三郎

一般參加は1、（但し白馬まで）とに決定した。

○豫科山岳部獨立　六月廿九日

一橋豫科會定期總會に於て山岳部獨立の件、萬場一致で通過し、今日より豫科山岳部は正式の部として認められる。

○西川先生歡迎懇談會　七月三日　於小平十九室

出席者　西川正身先生
（本科）堀岡　清、林　俊介
（豫科）望月達夫、小谷部全助、森脇芳之、塚本駿
小林重吉、鷲崎雄四郎、湯田坂哲、森川眞三郎、西野博、佐々木誠、原鐵三郎、岩崎利一、清水慶一

此度豫科に來られた山がお好きな西川先生を歡迎す。同先生を圍んで來る可き夏山のことが主に話された、

編輯後記

凡そ十年と言ふ年月は一つのエポックを劃するもの〻様に言はれてゐる。當部も亦その例に洩れぬ。十週年記念號たる六號の後を受けての本號の形式的退歩は、近來當部が部員に於て蒙らせられた質的及量的苦難と、それに加へての財政困難の所産である。又此の種の部報が既に商品的價値を失つたといふ事も亦その原因である事は見逃せぬ。

乍然此の事は、我々の山への意慾が豪末でも減少したといふ事の證左ではない。本號以下の全てが、以前にも增してより勝れたる實質と形式とを備へる事を信じて疑はぬ。本號が長かるべき一橋山岳部の歴史を繋ぐ一點として役立てば我々の目的は達せられたと言ひ得よう。最後に煩はしい仕事の一切が望月君の手に依つてなされた事を記さねばならぬ。

（堀岡）

蛇足の様だが筆をさらせて戴く。御多忙中にもかゝはらず、磯野先輩が原稿と寫眞を下さつた事は、私共の望外の喜びである。暑かつたから不慣れな仕事だから、とは云ふもの〻、仕事をしてみると無力さの限りを示した様で慚愧に堪えぬ。針葉樹會員諸氏の御援助に感謝する。（望月）

編輯委員　堀岡　清、林　俊介、望月達夫

昭和九年十月五日印刷
昭和九年十月十日發行

編輯兼發行者　小檜山市色内町四　堀岡　清

印刷者　中島晴保　東京市日本橋區濱町二丁目七〇番地

印刷所　中島印刷所　東京市日本橋區濱町二丁目七〇番地　電話浪花五、二一七番

發行所　一橋山岳部　東京府北多摩郡谷保村國立　東京商科大學内

北アルプスへ

お出の節は是非お立寄り下さいませ
お待ちして居ります

松本驛前
飯田屋旅館
食堂部

電話二七番
六一四番

市外專用二番

各鐵道省
山岳部
ジヤパン・ツーリスト
ビユーロー
東京營林局
御指定

雪の野澤溫泉

舞ひ上る粉雪搖ぐ湯煙
スキーヤーの理想鄉

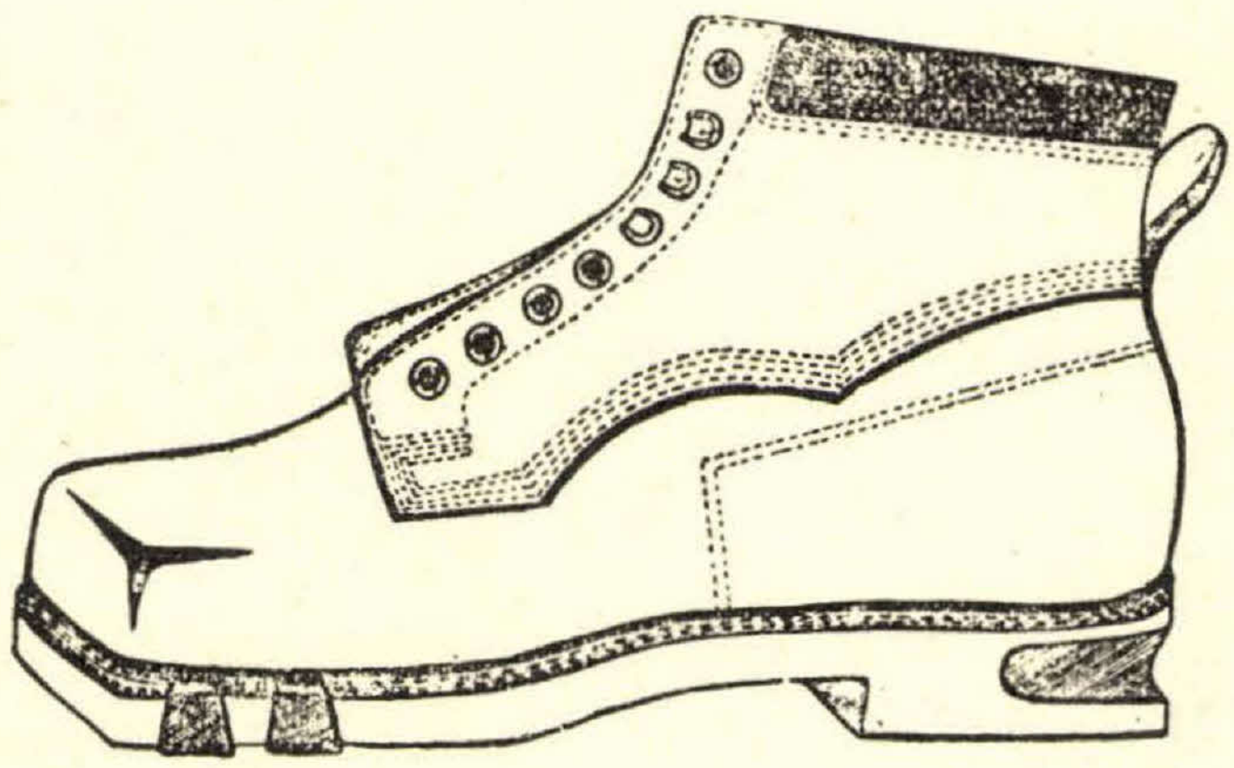
飯山鐵道上境驛より三十町
雪質良好・湯量豊富

内湯さか屋旅館

電話一八番

靴山登と靴ーキス

—呈贈錄型第次込申御—



靴{ーキス と 山登} ◆

◆鋲 クリケンルー(一本三錢) ニコリトー(一本三錢) 各豐富にあります

圓五十　製革水防

圓　十…製革水防

タシチヤリ皮

八圓五十錢ヨリ拾圓

尚地方御注文の節は足形及足袋文數を御申越

次第實費代金引換小包にて御送附申上げます

各大學山岳部御用

靴久布津店

東京市牛込區肴町六拾番地電車通

電話牛込(34)一六四〇番

振替口座東京四八八一四番

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第７号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　(株)　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７

米國産ヒツコリー材直輸入

芳賀スキー製作所本店

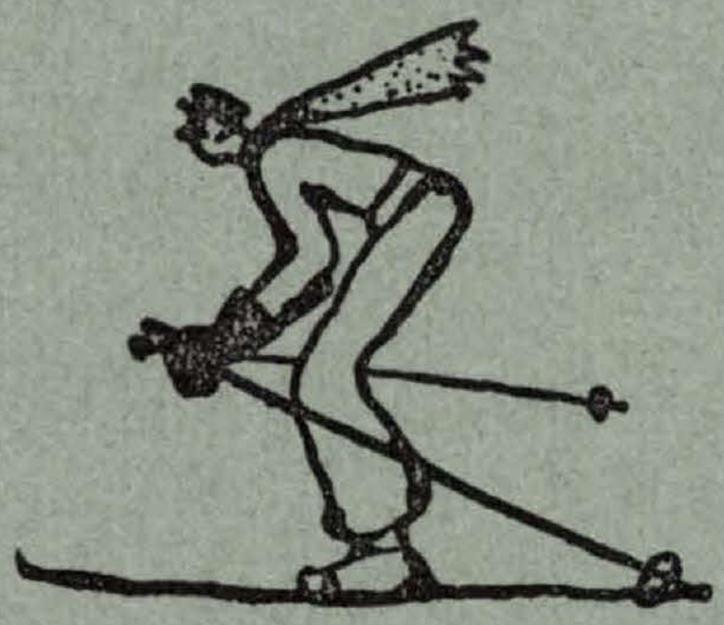
店主　芳賀恒太郎

札幌市圓山五丁目停留所前

電話三八五番・振替小樽六八六〇番

——型錄送呈——

山岳用スキーとアザラシ
ゾンメルシーとアイゼン



スキー靴、登山靴
ビルゲリーアイゼン

東京販賣所

東京市神田區神保町三ノ三（神保町ビル）

（片桐商店二階）

